

福岡市埋蔵文化財調査報告書第879集

山王遺跡 2

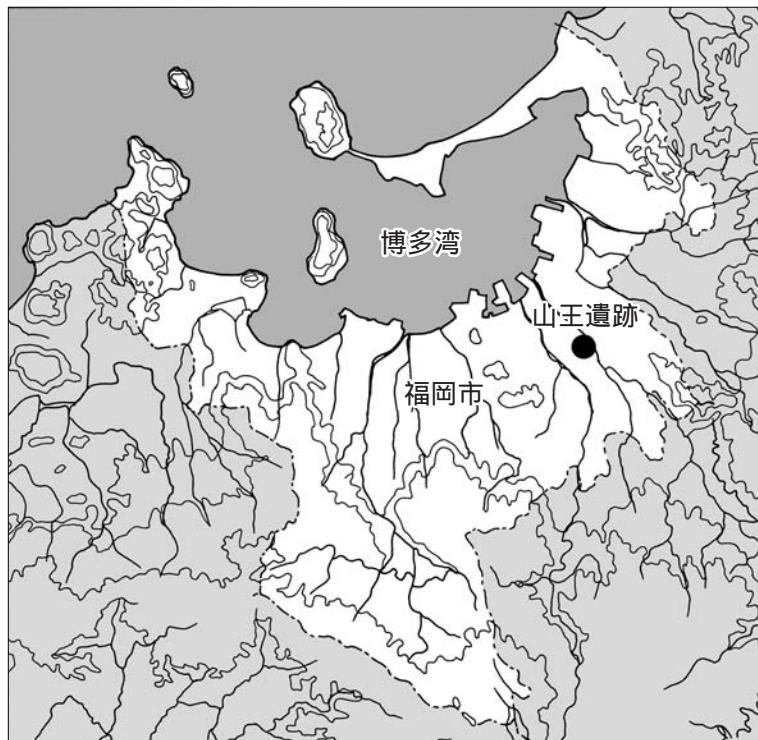
—第3次調査報告—

2006

福岡市教育委員会

さん の う
山王遺跡 2

- 第 3 次調査報告 -



遺 跡 略 号 SNN-3

遺 跡 調 査 番 号 0468

2006

福岡市教育委員会

序

西日本屈指の都市として今も発展を続ける福岡市は、古くより大陸文化の受け入れ口の役目を果たし、豊かな文化財が今なお地下に眠る街でもあります。都市の開発と埋蔵文化財の保護は相容れないことが常ですが、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりを心がけ、これを子供たちに伝えていくことが現代を生きる我々のつとめであると言えましょう。

福岡市教育委員会では埋蔵文化財を保護するとともに、開発によってやむなく破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は共同住宅建設にともない実施した山王遺跡第3次調査成果について報告するものです。調査では中世の集落跡などを確認したほか、木製の独楽が出土し当時の遊具や娯楽についてもその一端を伺うことができました。

調査に際し、地権者である池浦慎一様に快いご理解と多大なるご協力を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。また、関係者の皆様方のご尽力により調査を円滑に進めることができましたことを感謝致します。この報告書が広く活用され、文化財保護の理解を深める一助となれば幸いです。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　言

1. 本書は平成16(2004)年12月1日から平成17(2005)年1月12日に福岡市教育委員会が行った、博多区山王2丁目13-3番地所在の山王遺跡第3次発掘調査の報告書である。
2. 当調査地点は福岡市文化財分布地図では「比恵甕棺遺跡」に含まれており、既に第1次調査を行い報告書も刊行しているが、今回の調査後、遺跡の内容を考慮して北側の山王遺跡に含めることとした。これによって生じた調査次数の変更等は下記の表に示すとおりである。
3. 発掘調査と整理報告書作成は共同住宅建設に伴う受託事業として行った。ただし、福岡市が定めた内規により、個人事業の際の125m²分については国庫補助金適用とした。
4. 検出遺構には発見順に3桁の連番号を与え、遺構の性格を示す記号として、SD(溝) SE(井戸) SF(道路状遺構) SK(土坑) SX(性格不明遺構) SP(柱穴)を頭に付した。
5. 本書に使用した遺構実測図の作製は、吉武 学、坂口剛毅が行った。
6. 本書に使用した遺物実測図の作製は、吉武、田中克子が行った。
7. 本書に使用した写真の撮影は、吉武が行った。
8. 本書に使用した図の製図は、吉武、田中が行った。
9. 本書に使用した方位は全て磁北である。
10. 本書の執筆は、土器を田中が担当し、吉武が補足した。陶磁器は「博多出土貿易陶磁分類表」(福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 - 博多 - 福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集 別冊 福岡市教育委員会 1984)に基づき記述した。その他は吉武が行った。
11. 本書の編集は吉武が行った。
12. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理・活用する。

山王遺跡調査・報告書一覧

調査番号	次数	旧称	所在地	調査期間	調査原因	報告書
9815	1	比恵甕棺遺跡第1次	博多区山王2丁目2-12	19980521 ~ 19980622	事務所・倉庫	625集
0459	2	山王遺跡第1次	博多区山王1丁目9	20041101 ~ 20050330	浸水対策施設	878集
0468	3	比恵甕棺遺跡第2次	博多区山王2丁目13-3	20041201 ~ 20050112	共同住宅	本書

「箱崎9・比恵甕棺遺跡 - 箱崎遺跡群第14次・比恵甕棺遺跡第1次発掘調査報告 -」福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集 2000 福岡市教育委員会
「山王遺跡1・山王遺跡群第2次調査報告 -」福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集 2006 福岡市教育委員会

遺跡調査番号	0 4 6 8		遺 跡 略 号	S N N - 3	
調査地地籍	博多区山王2丁目13-3		分布地図番号	37 東光寺 0128	
開発面積	430.12 m ²	調査対象面積	252.39 m ²	調査面積	274 m ²
調査期間	2004(平成16)年12月1日 ~ 2005(平成17)年1月12日				

本文目次

第一章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 山王遺跡第3次調査地点の位置と周辺の遺跡	2
第二章 発掘調査の記録	4
1. 発掘調査の方法と経過	4
2. 層序	4
3. 検出遺構と出土遺物の概要	4
4. 検出遺構と出土遺物	6
(1) 波板状遺構・溝状遺構	6
(2) 井戸	12
(3) 土坑	14
(4) その他の出土遺物	22
第三章 おわりに	26

挿図目次

Fig. 1 山王遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000)	2
Fig. 2 山王遺跡第3次調査地点の周辺地形 (1/5,000)	3
Fig. 3 山王遺跡第3次調査区の位置 (1/1,000)	3
Fig. 4 遺構の配置 (1/100) と土層略図 (1/40)	5
Fig. 5 溝SD-011、波板状遺構SF-030 (1/60)	7
Fig. 6 SD-011・015出土遺物 (1/3)	8
Fig. 7 SF-030出土遺物 (1/3)	8
Fig. 8 溝SD-003・016・021・025 (1/60)	9
Fig. 9 SD-003・016・021・025出土遺物 (1/3)	10
Fig. 10 井戸SE-013・020・023 (1/40)	12
Fig. 11 SE-013出土遺物 (1/3)	13
Fig. 12 SE-020・023出土遺物 (1/3)	14
Fig. 13 土坑SK-001・002・004・005・006 (1/40)	15
Fig. 14 SK-001・002・004出土遺物 (1/3)	16
Fig. 15 SK-005・006出土遺物 (1/3)	18
Fig. 16 土坑SK-014・017・035・037・038 (1/40)	20
Fig. 17 土坑SK-014・017・035・037・038出土遺物 (1/3)	21
Fig. 18 その他の出土土器・土製品 (弥生時代～古代)(145は1/2、他は1/3)	23
Fig. 19 その他の出土土器 (古代・中世)(1/3)	24
Fig. 20 木製品・石製品 (1/3)	25

図版目次

扉	区作業風景（北西から）	
PL. 1	1 . 区全景（南東から）	2 . 区全景（南東から）
PL. 2	1 . 区全景（南東から）	2 . SD-011（西から）
PL. 3	1 . 区SF-030西半部（南東から）	2 . 区SF-030東半部（南東から）
PL. 4	1 . 区SF-030のSP-183土層断面（南から）	2 . SD-003（東から）
	3 . SD-016（西から）	4 . SD-021北半部（北から）
	5 . SE-013（北東から）	
PL. 5	1 . SE-020（南東から）	2 . SE-023（南東から）
	3 . SK-001（南西から）	4 . SK-005・006（北から）
	5 . SK-009（北東から）	6 . SK-033（北東から）
	7 . SK-034（北から）	8 . SK-035（南から）
PL. 6	出土遺物（縮尺不同）	

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市では文化財保護法の趣旨に基づき、市域内の埋蔵文化財の適切な保存と活用をはかるため、各種開発事業に対する事前審査や緊急調査、重要遺跡確認調査などを実施している。このうち民間開発においては、ビル建設などの開発行為が予定された場合には事前に試掘調査等を行って遺跡の状況を確認するとともに、その保存が困難な場合には地権者等の協力を得て記録保存のための発掘調査を実施している。

平成16年、福岡市博多区山王2丁目13-3の宅地430.12m²において、池浦慎一氏による共同住宅建築が計画され、福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下「埋文課」）に10月7日付けで埋蔵文化財の有無についての照会があった。申請地は福岡市文化財分布地図上では比恵甕棺遺跡に含まれ、かつ第1次調査地点の南東隣接地に当たるため、遺跡が存在する可能性が極めて高いものと考えられた。このため、埋文課では平成16年11月2日に試掘調査を行い、申請地に対して設けた1ヵ所のトレーンチにより、地表下1.45～1.5mで溝、ピット等の遺構を検出し、輸入陶磁器等の出土から古代～中世の集落跡が存在することを確認した。試掘の結果を受けて保存について協議したが、予定建築物がビルであるため地下への影響は避けがたい状況にあり、建築工事によって破壊を受ける範囲252.39m²に対し、やむなく記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は平成16(2004)年12月1日から翌平成17(2005)年1月12日に、整理報告書作成は平成17年度に、ともに埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書に基づく受託事業として埋文課が行った。ただし、福岡市が定めた内規により、個人事業としての国庫補助適用面積割合分（125m²/252.39m²分=49.5%）については国庫補助金より充当した。調査後には例言に述べたように、遺跡の内容を考慮して比恵甕棺遺跡を北側の山王遺跡に含めることとした。

2. 調査の組織

調査委託	池浦慎一
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 植木とみ子
調査総括	埋蔵文化財課長 山口譲治 埋蔵文化財課調査第2係長 池崎譲二
調査庶務	文化財整備課管理係 御手洗 清（前任）鈴木由喜（現任）
調査担当	埋蔵文化財課事前審査係 久住猛雄（試掘・事前協議担当） 埋蔵文化財課調査第2係 吉武 学（調査担当）
調査協力	坂口剛毅（技能員）池田省三、上野龍夫、江島光子、加藤常信、唐島栄子、坂下達男、大長正弘、高野瑛子、谷 英二、中村尚美、永松トミ子、布江孝子、三浦 力、山下智子、結城フチ子、吉住政光、吉田恭子、吉田米男（五十音順、敬省略）
整理協力	田中克子（技能員）下山慎子、萩尾朱美、森 寿恵（五十音順、敬省略）

事業主の池浦慎一様には調査について快くご理解頂くとともに、多大なるご協力を賜りました。また、請負業者である株式会社コマーシャル・アーリーには条件整備等についてご尽力頂きました。ここに記して深く感謝の意を表します。

3. 山王遺跡第3次調査地点の位置と周辺の遺跡 Fig. 1~3

背振山系と東平尾丘陵に挟まれた福岡平野中央部には、御笠川・那珂川等の河川により形成された洪積中位段丘面の断続的な連なりが東西に2列認められる。福岡市博多区博多駅南から那珂、南区五十川、井尻、寺島、春日市須玖、下白水を経て那珂川町安徳にのびる面と、福岡市博多区板付から諸岡、麦野、元町を経て春日市春日原に達する面で、これらは地質学上須玖面と呼ばれ、主に阿蘇山起源の広域テフラであるAso-4火碎流堆積物によって構成され、沖積低地から3~20mの比高差を有する平坦な台地となっている。この台地は沖積作用により更に細かく枝分かれし、あるいは低平な独立丘となるが、博多駅南から那珂方面に連なる台地には特にそれが顕著に認められる。山王遺跡が位置する台地も西側に谷が入り込み、東は御笠川に浸食されて北西へ岬状に伸びており、先端には標高11m強の独立丘がそびえ、現在は山王を祀る日吉神社が置かれている。Fig. 2の古地図ではこの岬の付け根あたりにも標高9m強の独立丘陵状の高まりが認められ、中央部は古代官道に貫かれて切り通しとなっていることが比恵遺跡群第79次調査により判明した。第3次調査地点はこの高まりが東へ落ちて沖積水田との境をなす斜面に位置しており、盛土下の水田耕作土の標高は5.5m前後であった。

周辺遺跡には、谷を隔てた西側台地上に比恵遺跡群があり、その南の一連の台地上に那珂遺跡群が続き、北側は後背湿地を挟んで海岸沿いに形成された砂丘上に博多遺跡群が展開する。これらの遺跡では弥生時代早期に集落の形成が始まり、以後中世に至るまで奴国、那珂郡の拠点ないし中心であったことを示す遺構や豊富な遺物、なかんずく我が国の対外交流の窓口であったことを物語る大陸・半島系の文物が多数出土している。現在までに、比恵・那珂遺跡群で各40冊以上、博多遺跡群で100冊を越える発掘調査報告書が刊行されており、各遺跡の内容についてはこれらの報告書に譲る。

山王遺跡のこれまでの調査は例言に表で示した。本地点の北西に隣接する第1次調査では、6世紀後半と中世後期の溝、井戸、柱穴等の遺構を確認し、猿を描いた護符状木製品等が出土した。



Fig. 1 山王遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000)

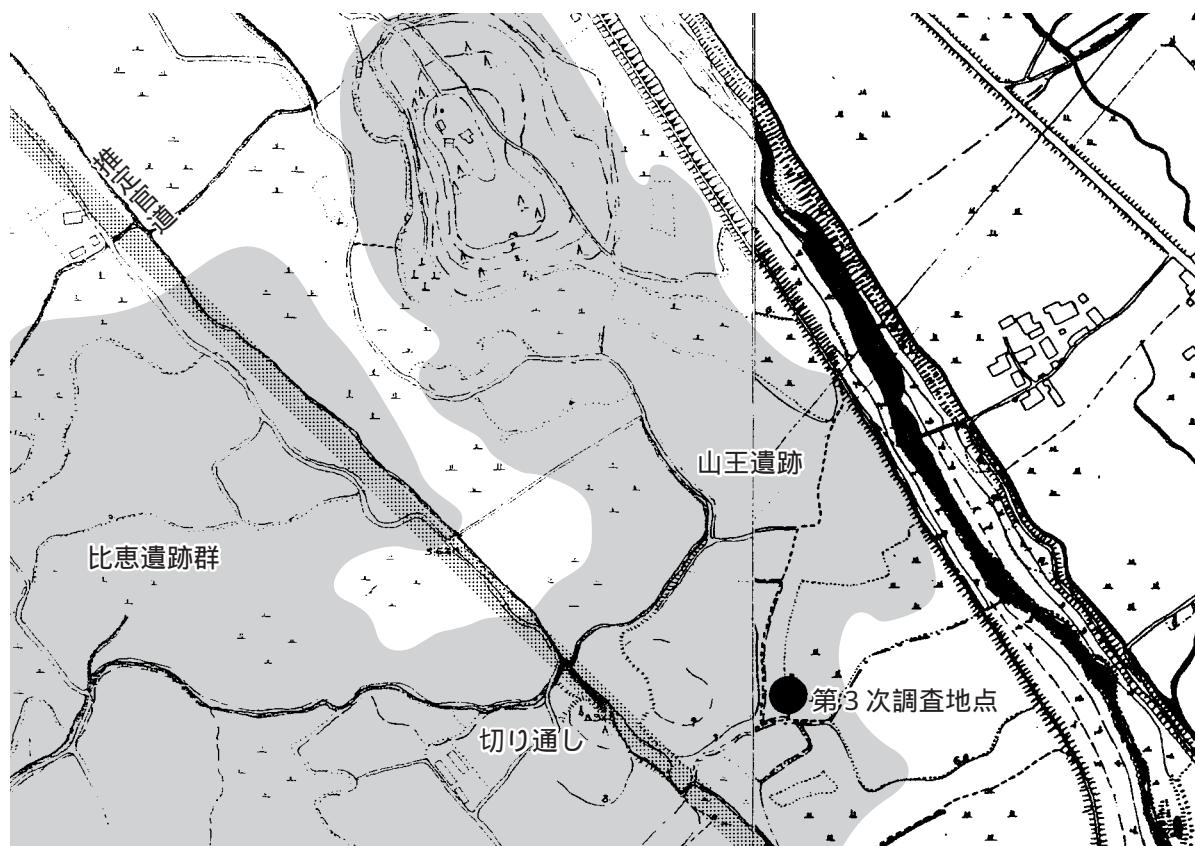


Fig. 2 山王遺跡第3次調査地点の周辺地形 (1/5,000) 地図は大正末～昭和初期



Fig. 3 山王遺跡第3次調査区の位置 (1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の方法と経過

山王遺跡は博多駅南から那珂方面に連なる洪積中位段丘面上に立地しており、谷部を境として西側の比恵遺跡群と分けられる。第3次調査地点は、第1次調査地点（旧称「比恵甕棺遺跡」）の南東に隣接し、申請地は現在の街区に沿って北西・南東に長く、長辺26.5m、短辺15.85～16.54mを測る。うち、建築工事によって破壊を受ける部分は中央の19.25m×14.55mの範囲で、敷地奥側（北西）と手前（南東）には破壊を免れる残地がある。よって、この部分は建築予定範囲ぎりぎりまで調査区を設定したが、他は家屋が迫るため1mほどの引きをとった。当初は反転による二分割で調査を行う予定であったが、遺構面までが深く残土が多量となつたため、結局3分割せざるをえなかった。調査はまず敷地奥側について行い、これを 区とし、残る部分は東西に分け、西側を 区、最後を 区とした。3つを合わせた調査区の形状は、20m×13.7mの長方形で、調査面積は274m²である。

遺構実測は調査区の形状に合わせて任意に設置した基準線をもとに1/100平板測量、1/20平面実測によって行った他、適宜土層図等を作成した。その後、『博多区・南区内（那珂～井戸地区）遺跡基準点測量委託 四級基準点測量成果簿（平成6年2月）』の成果を利用して国土座標（第 系）上に位置づけた。標高もこれによっている。

2. 層序 Fig. 4

地表面の標高は6.7m、遺構面までの深さは北側で約1.5m、南側で約2mを測り、南東へ深い。地表から1m強まで盛土で、直下に水田耕作土とみられる灰黒色粘質土、及び床土とみられる暗褐色粘質土が堆積する。遺構面は北半がAso-4火碎流堆積物である鳥栖ローム下部、南半は同じく八女粘土で、調査区中央を境に南東へ落ちる。低い部分には中世遺物を若干含む黒色粘質土が堆積しており、中世遺構の一部には遺物包含層の上面で確認できるものもあったが、面的に分けた調査は行っていない。遺構面の標高は4.9～5.3mを測る。中世以降に開田により強く削平を受けたものと思われ、北側では遺構の残りが悪いが、南側では遺構が深く残りがよい。

3. 検出遺構と出土遺物の概要 Fig. 4

検出遺構は、古墳時代後期の土坑4基、中世の波板状遺構1、溝5（うち1条は道）、井戸3、土坑5、開田によると思われる段落ち、ピット多数である。中世の遺構は白磁を主体とする12世紀代と考えられるものと、龍泉窯系青磁を含む13世紀後半代以降と考えられるものがあり、前者が主体を占める。また遺構は未確認だが、弥生時代中期と古代の遺物が出土している。遺構覆土はおおむね古墳時代が黒色粘質土、中世が暗褐色粘質土である。この他、南端部に検出したSK-022・026・029・033・034等は、地山が再堆積した粘質土の下部に黒色粘質土が薄くもぐり込む土層堆積状況を示すことから倒木痕であると考えられ、一部の遺物を除き今回の報告から省いた。

出土遺物はコンテナ20箱で、甕棺片を含む弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器・綠釉陶器・越州窯系青磁、中世の国産土器・輸入陶磁器・石製品などがあり、特筆すべき遺物として木製の独楽とその未製品がある。

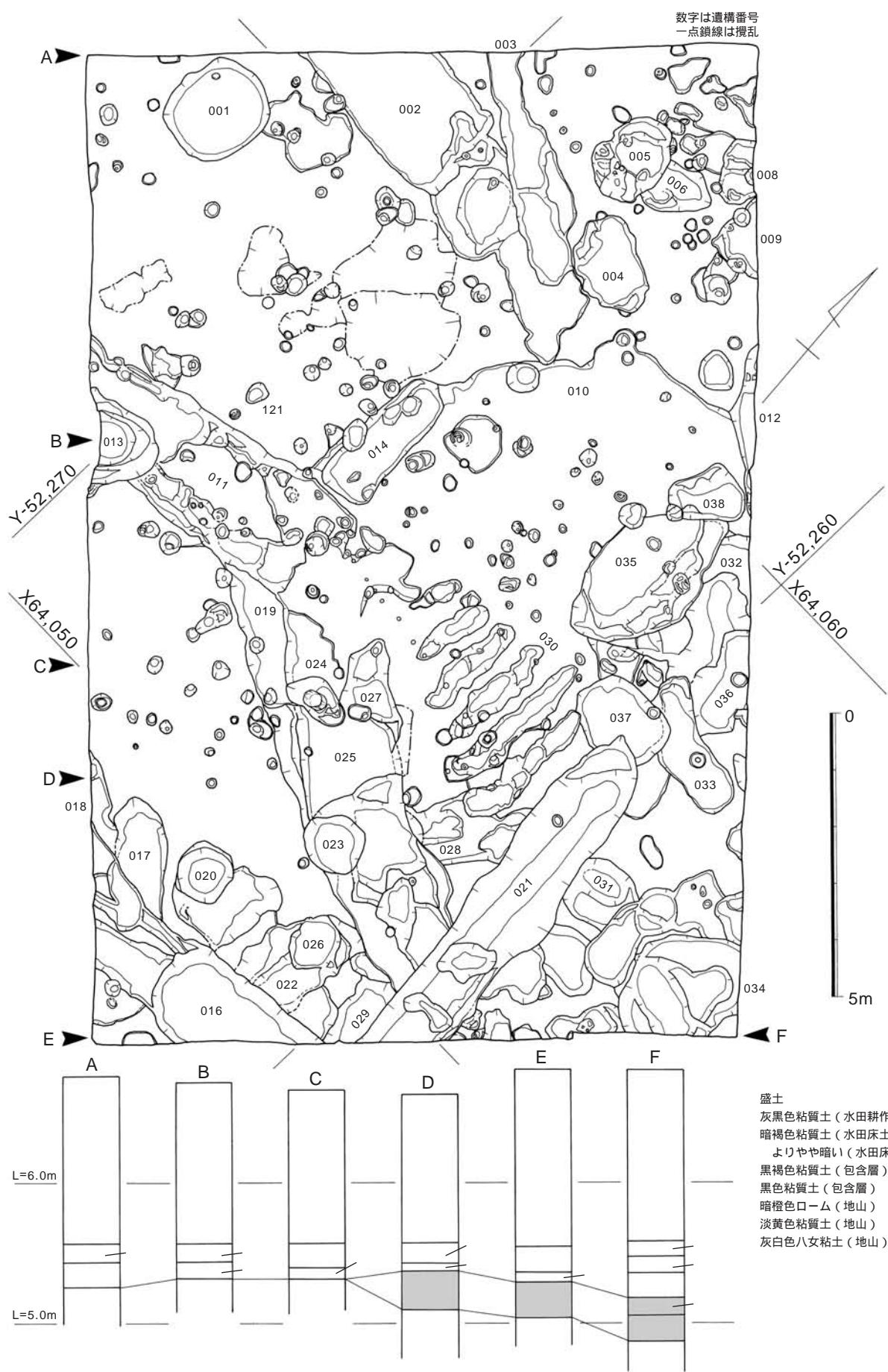


Fig. 4 遺構の配置 (1/100) と土層略図 (1/40)

4 . 検出遺構と出土遺物

(1) 波板状遺構・溝状遺構

溝状遺構は計6条を検出した。うち、SD-011は道路とみられ、波板状遺構SF-030との関連が考えられるため初めて初めて報告し、次に他の溝状遺構を番号順に報告する。

SD-011 Fig. 5、PL. 2

調査区中央～西壁に検出した。東西に伸びる溝状の遺構で、主軸方位は磁北にほぼ直交する。西端は井戸SE-013に切られるが、更に調査区外へ伸び、東側は基盤土が落ちて行くため削平消滅している。幅は約2mで、長さ6mほどを確認した。深さは10～20cmである。溝の底面はほぼ平坦で、残りの良い部分では両側縁が小溝状に窪む。小溝は北縁のものが幅20cm前後、深さ5cm程度、南縁のものが幅50cm前後、深さ10cm程度である。この小溝に挟まれた平坦部分には凹凸があり、一部には牛蹄状の窪みも認められる。平坦部分に特に硬化した部分は認められないが、道路跡と考えられる。削平消滅している東側の延長上には波板状遺構SF-030があり、連続する道路と考えられる。北側の小溝はSD-015の番号で遺物を取り上げた。

SD-011・015 出土遺物 Fig. 6

弥生土器、古墳時代須恵器、黒色土器、中世土師器小皿・壺、瓦器、須恵質土器、中国産陶磁器（越州窯系青磁・白磁）が出土した。

1は土師器小皿である。摩滅した小片のため、底部調整痕は不明で、法量も不正確である。2は土師器壺で、底部ヘラ切り。3は瓦器椀である。器壁は薄く、粗くヘラミガキを施す。外面に指押さえ痕が残る。焼成が良く少し銀化する。畿内系の瓦器椀か。4・5は越州窯系青磁碗で、精製品である。以上は2がSD-015、他はSD-011から出土した。

出土遺物から、12世紀中頃～後半頃の遺構と考えられよう。

SF-030 Fig. 5、PL. 3・4

溝状遺構SD-011を東へ延長した部分に検出した。南北に細長い土坑状の窪みで、東西に列をなして連続しており、波板状遺構と考えられる。主軸がSD-011にほぼ一致しており、連続する道路跡の可能性が強いが、後世の開田時に削平を受けたと考えられ、本来はSD-011がこの部分まで伸びていた可能性がある。窪みは近接して7つが連続するが、東端部で溝SD-021に切られており、その東側には伸びない。波板状遺構全体の東西の長さは4m強で、列の北端はSD-011の延長上に頭がほぼ揃う。窪みの平面プランは細長い橢円形状だが不整で、最も短い西側のSP-176で長さ1.0m、最も長いSP-182で長さ3.0mを測る。西側の窪みほど短く、東へ順次長くなるが、南西部には開田による段落ちがあるため、削平により消滅してこのような不揃いな形状になったのであろう。SP-177の土層断面図に一例を示すように、覆土には黒色～灰黒色粘質土や砂粒を含む粘質土がこね回されたような状態で入っていた。各窪みの底面には凹凸があるが、いずれも中央付近が最も深く、10～25cmの深さがある。

SF-030 出土遺物 Fig. 7

弥生土器、古墳時代須恵器、中世土師器、瓦器、黒曜石チップが出土した。

6は須恵器蓋壺の小片である。外面に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号を入れる。SP-183出土。7は筑前型瓦器椀である。高台は低く小さい。摩滅しておりミガキの単位は明瞭でない。SP-182出土。

出土遺物では時期を決めがたいが、SD-011と同時期の遺構と考えられる。

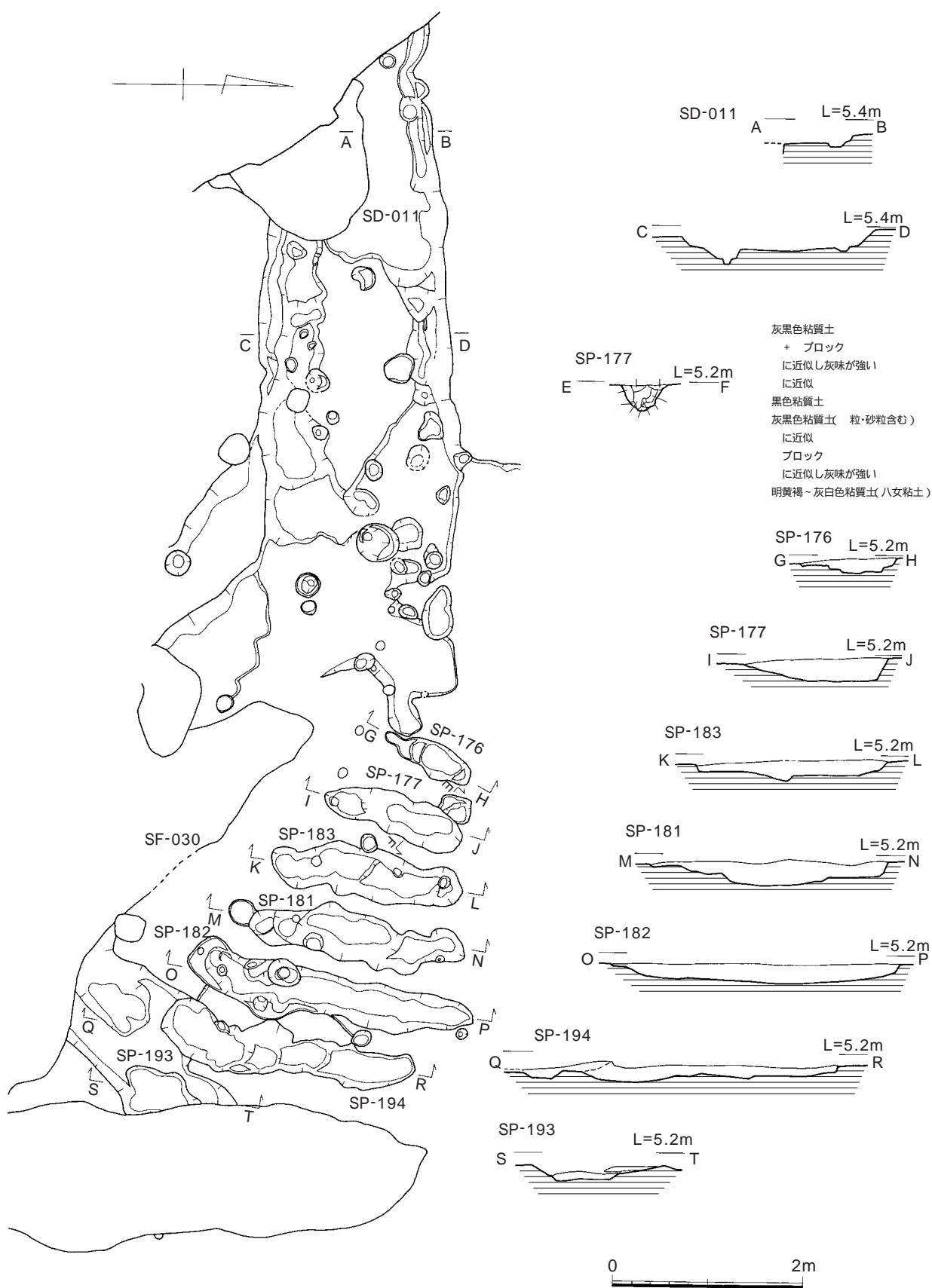


Fig. 5 溝SD-011、波板状遺構SF-030 (1/60)

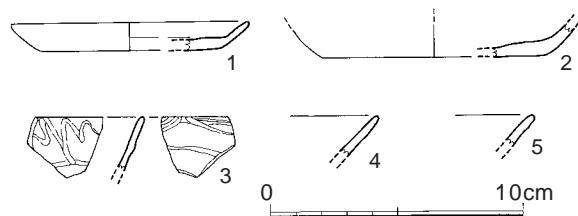


Fig. 6 SD-011・015出土遺物 (1/3)

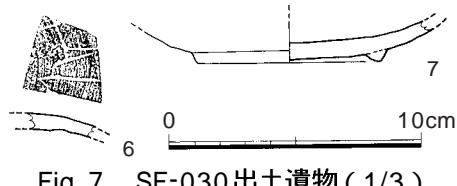


Fig. 7 SF-030出土遺物 (1/3)

SD-003 Fig. 8、PL. 4

調査区の北東部に検出した。北側は調査区外へ伸びている。南側は地形が落ちる手前で浅くなっている、削平により消滅したものか。主軸方位は磁北から 44° 西偏する。長さ5.6m以上、幅0.4~1.3mで、深さは15cm以下である。底面は中央部が若干深いが、全体として勾配はほとんどない。

SD-003 出土遺物 Fig. 9

弥生土器、古墳時代須恵器、中世土師器小皿・壺、瓦器、高麗焼締陶器が出土した。

8・9は須恵器蓋壺の小片で、蓋身の区別はつかない。外面に回転ヘラ削りを施し、ヘラ記号を入れる。10・11は土師器小皿で、底部糸切りである。10は復元口径7.2cm、器高1.3cm。11は復元口径9.4cm、器高1.2cm。

中世前半の遺構とみられるが、詳細時期は不明である。

SD-016 Fig. 8、PL. 4

調査区の南西隅に検出した。主軸方位は磁北から 87° 西を向き、ほぼ東西方向を指す。北岸で長さ5.8mを測り、幅は1.3~1.7mである。西半分は枝状に分岐しており、複数の溝が切り合う可能性がある。また、東半は一段深くなっている、土坑が切り合っている可能性もあるが、出土遺物に時期差は認められない。底面は平坦で、東へ傾斜しており、北半部で深さ10~20cm弱、南半部で深さ50cmを測る。

SD-016 出土遺物 Fig. 9、PL. 6

弥生土器、古墳時代須恵器、古代綠釉陶器、中世土師器小皿・壺、瓦器、中国産陶磁器（越州窯系青磁・白磁）、高麗焼締陶器、土製品、砥石が出土した。

12~14は土師器小皿である。12は底部ヘラ切りで、口径9.8cm、器高1.8cm。13は底部糸切りで、復元口径8.2cm、器高1.1cm。14も底部糸切りで、復元口径9.0cm、器高1.0cm。15・16は高台が付く小皿である。15は底部ヘラ切りか。口径10.3cm、器高2.1cm。底部中央に焼成後の穿孔がある。16は高台が高く、高台上部に焼成後に削って開けた方形の透孔がある。1/2周弱の破片で、透孔の全体数は不明である。17は綠釉陶器の椀で、端部は外反する。素地は黄白色で軟質である。小片のため法量不明。18は土師器丸底壺で、底部ヘラ切り。内面にミガキを施すが残りが悪く、コテ当て痕は確認できない。復元口径14.4cm、器高3.8cm。19~23は筑前型瓦器椀である。いずれも口縁は内湾して開き、体部外面の中位が窪む。23のみはミガキが入念に施され、焼成も良好で表面が一部銀化する。他は器面が摩滅しているとは言え、ミガキが雑な印象を受け、20・21には外面下半に指押さえ痕が残る。19は口径17.3cm、器高6.6cm。20は口径16.2cm、器高5.8cm。21は復元口径16.1cm、器高5.5cm。22・23は復元口径16.8cm。

24は越州窯系青磁碗である。粗製品で、体部下半は露胎とする。釉下に化粧土を施しており、見込みには目跡が残る。25は白磁碗類の口縁部小片である。26は白磁の壺であろう。胎土は乳白色を

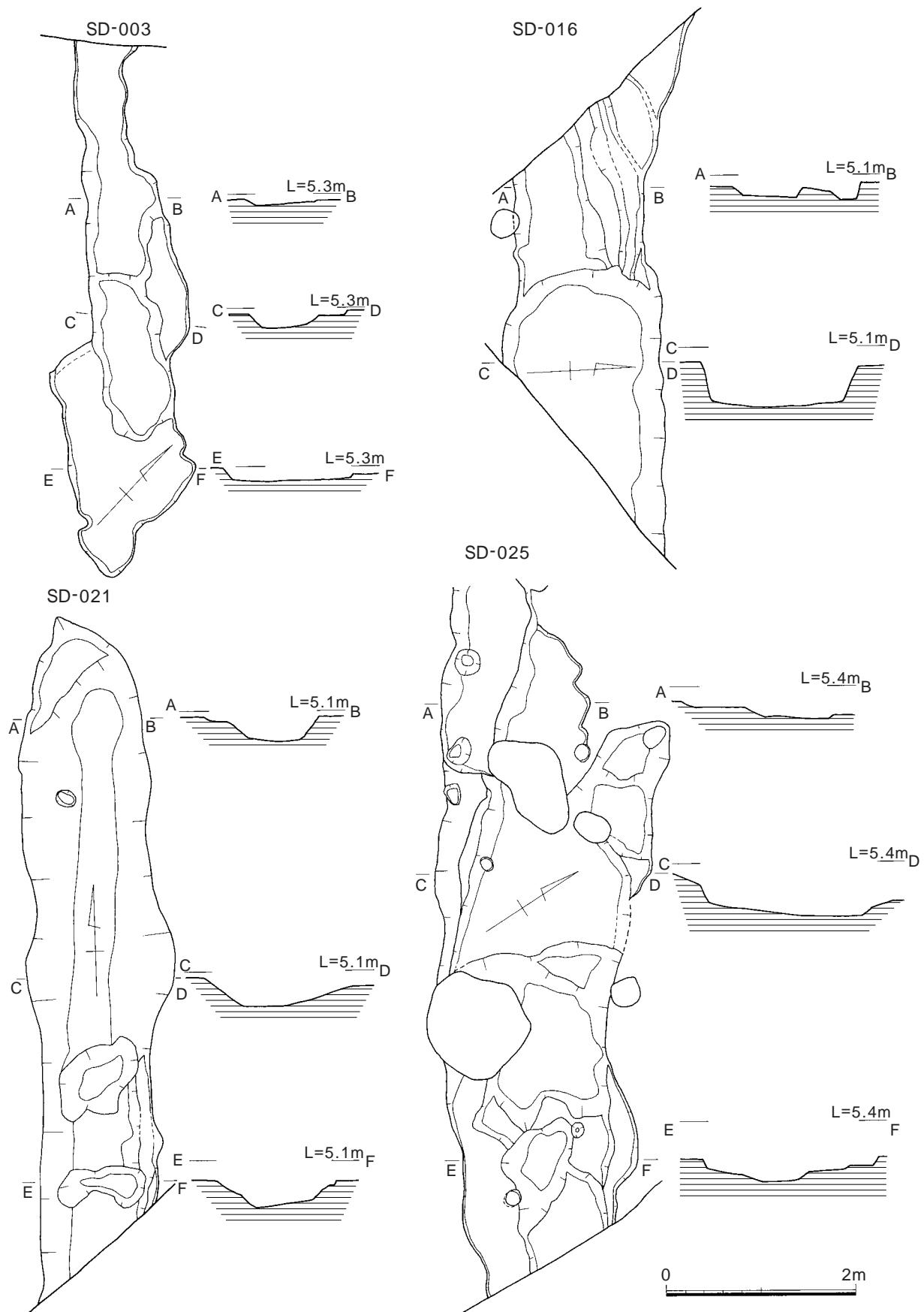


Fig. 8 溝SD-003・016・021・025 (1/60)

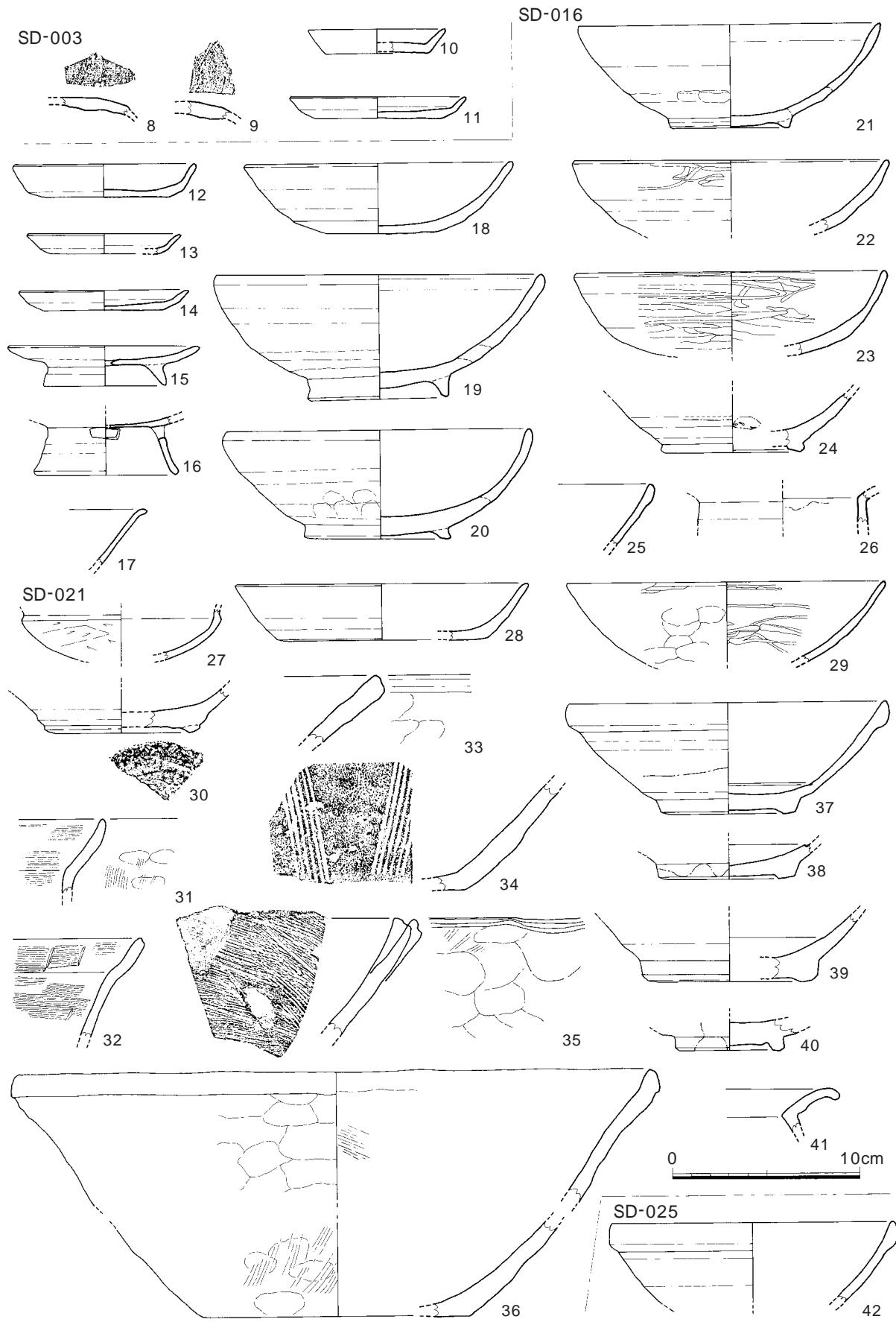


Fig. 9 SD-003 · 016 · 021 · 025出土遺物 (1/3)

呈し精良かつ硬質、釉は僅かに黄味がかった透明釉で、外面から口縁内面に施釉し、体部内面は露胎である。胎土・釉の特徴から広東産と思われる。

遺構の時期は12世紀前半～中頃とみられる。

SD-021 Fig. 8、PL. 4

調査区南東部で～区にまたがって調査した。遺構面を覆う黒色粘質土の上面で検出でき、他の遺構より一段新しい時期の遺構である。水田に伴う水路である可能性をもつ。主軸方位は磁北から1°東偏し、ほぼ南北を指向する。北端は削平により浅くなっている。南側は調査区外へ伸びる。長さ7.3mを確認した。幅1.2～1.6mで、横断面形は浅いU字形をなし、深さ30cm前後で、底面は南へかなり傾斜している。覆土は暗褐色粘質土である。

SD-021 出土遺物 Fig. 9

弥生土器、古墳時代土師器・須恵器、中世土師器小皿・壺、瓦器、須恵質土器鉢、瓦質土器すり鉢、土師質土器鍋、中国産陶磁器(越州窯系青磁・白磁・龍泉窯系青磁・陶器)、滑石製石鍋、砥石、凹石が出土した。

27は土師器で、古墳時代の椀と思われる。丸味のある体部で、口縁は内屈後外反して開く。体部外表面はヘラ削り、口縁横ナデ、内面ナデ調整。暗褐色で、胎土に細砂粒を多量に含む。28は土師器壺で、底部糸切り。復元口径15.6cm、器高3.0cm。29は瓦器椀で、器壁が薄い。口縁端部以外のミガキはまばらで、外面には指押さえ痕が残る。焼成は堅緻で器表面が銀化する。復元口径17.0cm。30は須恵質の山茶椀である。底部は糸切りで、貼付高台はかなり小型化しており、畳付にはモミ殻の圧痕がある。胎土は淡灰白色を呈しやや粗く、焼成は良好である。31・32は土師質土器の鍋で、口縁は外屈内湾する。外面は指押さえ痕を縦刷毛目でナデ消し、内面は横刷毛目調整である。外面にコゲ状の炭化物や煤が付着する。33～36は瓦質土器の鉢で、34は内面に6条一単位のスリ目が入り、35は片口が付く。器面の残りが悪いが、内外面とも指押さえ痕を刷毛目又はナデ調整する。36は口縁と底部が接合しないため、器形・法量に誤りがあるかもしれない。

37～39は白磁碗類である。37の復元口径は16.8cm、器高5.4cm。38は底部縁辺を細かく打ち欠いており、玩具として用いたのだろうか。40は龍泉窯系青磁碗類で、畳付の4ヶ所に赤く発色した目跡が残る。41は磁竈窯黄釉盤である。釉の残りは悪く、釉下に白化粧土を施し、口縁外面には白色の目土が残る。小片のため法量は不明。

この他、石製品をFig.20に示した。

他の遺構より時期が一段新しく、13世紀後半～14世紀前半頃に位置付けられよう。

SD-025 Fig. 8、PL. 1

区で検出した。北西側は削平され浅くなっている。南東側はSD-021に切られる。また、中央で井戸SE-023に切られる。主軸方位は磁北から58°西偏するが、北へ湾曲している。現況で長さ7mが残り、幅1.8m前後で、深さ10～40cmである。

SD-025 出土遺物 Fig. 9

弥生土器、須恵器、土師器壺(底部糸切り)、中国産白磁、滑石製石鍋、砥石が出土した。

42は白磁碗類で、釉に氷裂が入る。復原口径は15.0cm。

滑石製石鍋と砥石はFig.20に示した。

井戸SE-023に切られており、12世紀前半以前の遺構と考えられる。

(2) 井戸

SE-013 Fig.10、PL. 4

調査区の西壁際に検出し、1/2弱は区外にある。溝SD-011を切る。井戸側は認められない。北東 - 南西に長い楕円形プランを呈するものとみられ、短径1.7m、長径は2m前後となろう。遺構検出面から底面まで1.6m。覆土は 黒褐色粘質土(白色粘質土ブロック含む) 灰黒色粘質土(橙白色粘質土ブロック含む) 黒色粘質土、 深黒色粘質土、 淡黄～橙色粘質土 + 深黒色粘質土ブロックで、 暗褐色粘質土はSD-011覆土、地山土は 暗橙色粘質土、 黄白色粘質土、 淡灰青色シルト、 淡黄～橙色粘質土である。軟質な 層付近で壁が大きく抉れており、湧水痕跡を示すと思われる。

SE-013 出土遺物 Fig.11、PL. 6

弥生土器、古墳時代須恵器、黒色土器、中世土師器小皿・壺、瓦器、須恵質土器、中国産陶磁器(越州窯系青磁・白磁)、高麗焼締陶器、滑石片、木製品(独楽とその未製品)が出土した。

43は土師器壺で、底部ヘラ切りか。小片のため不正確だが復元口径15.0cm、器高1.8cm。44～47は瓦器椀で、内外面に隙間の多いヘラミガキを施し、外面には指押さえ痕が残る。46は薄手で、高台は細く断面方形をなし歪む。見込みのヘラミガキはジグザグ状に入る。焼成良好で一部が銀化する。48は東播系須恵質土器の捏鉢である。口縁端部は面取により凹み、外傾して内端がやや突出する。底部糸切りで外縁は使用により摩滅する。内面も使い込まれ平滑である。灰色を呈し、胎土に細かい白色砂粒を多量に、大粒の砂粒を僅かに含む。神手窯か。49は山茶椀で、外底縁に粘土を少量貼付して高台を造るが、退化してほとんど平底に近い。畳付にはモミ殻圧痕が付く。灰白色で、胎土は細かい黒色粒子を多く含み硬陶質。口縁内面に降灰が被る。復元口径9.8cm、器高2.3cm。

50は越州窯系青磁碗の粗製品である。外底は露胎で目跡が残る。51は高麗焼締陶器の壺で、口縁端部は面取により凹み、上方に突出する。密に横ナデするが、外面にタタキ、内面に指押さえの痕跡を認める。暗灰色で、細かい白色砂粒を少量含み硬陶質。口縁内面から外面に自然釉が被る。52も焼締陶器で、やはり高麗か。端部は肥厚して外面に段をなす。横ナデ調整。暗灰色を呈し、やはり胎土に

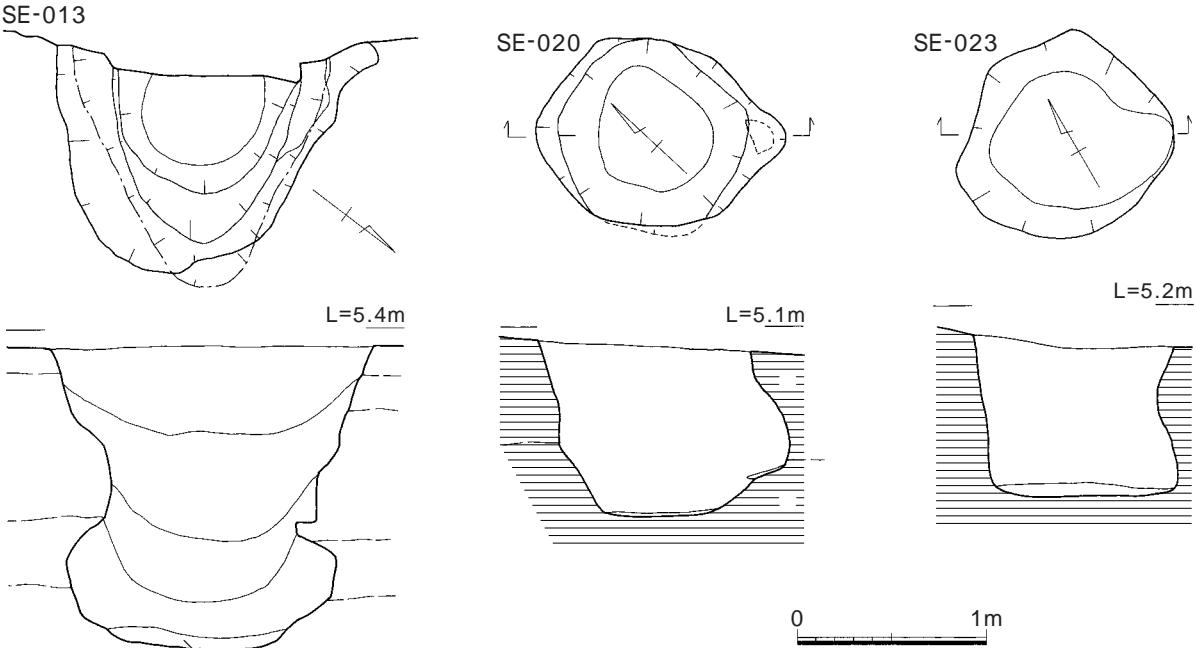


Fig.10 井戸SE-013・020・023 (1/40)

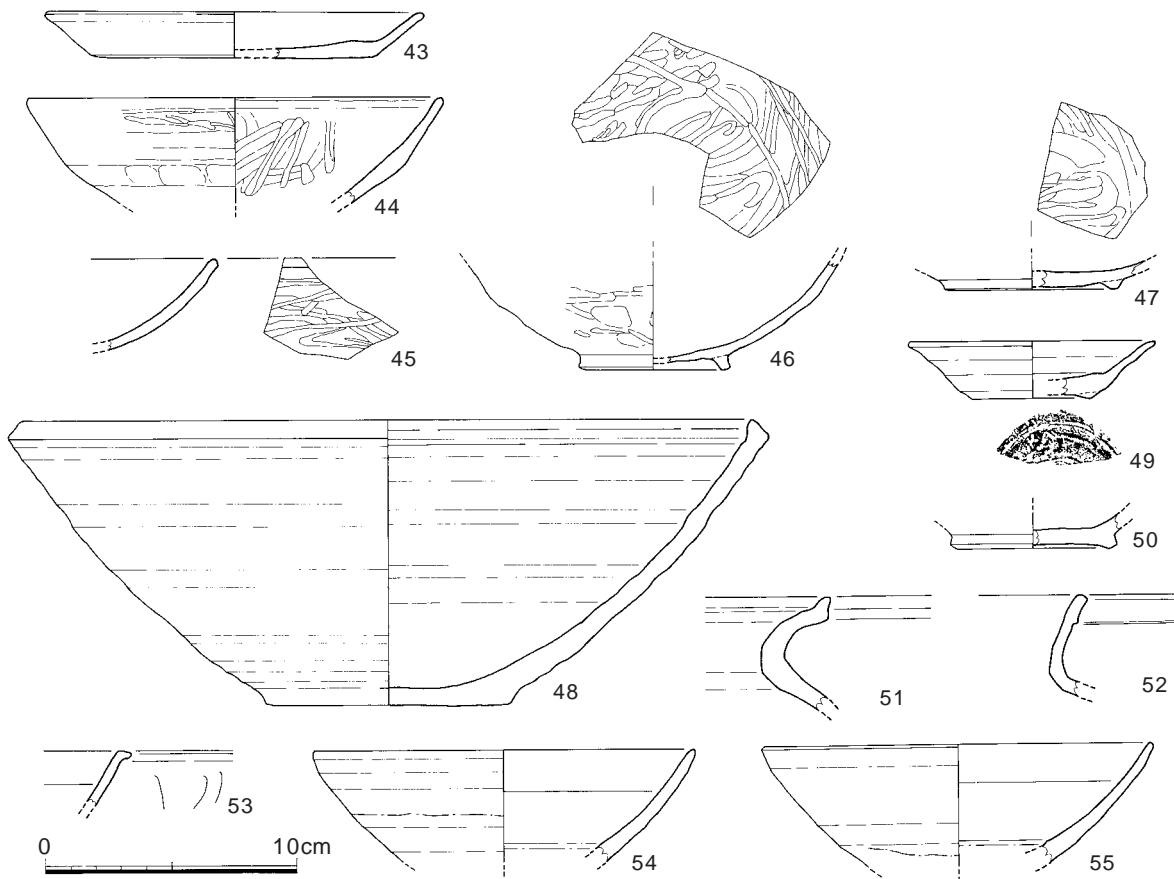


Fig.11 SE-013出土遺物 (1/3)

細かい白色砂粒を含み硬陶質。53は白磁碗類で、外面に縦の線彫がある。全釉でかなり黄味が強い。54・55は白磁碗類で、見込みの釉を輪状に剥ぎ取る。54は二次加熱を受ける。

その他、滑石製品、砥石、木製品についてはFig.20に示した。

12世紀中頃～後半の井戸と思われる。

SE-020 Fig.10、PL. 5

調査区の南西部に検出した。倒木痕SK-022を切る。平面形はほぼ円形を呈し、径1～1.1m、深さ0.9mを測る。覆土は黒褐色粘質土で、図に示した地山の土質は 黄白色粘質土、 硬く締まった灰色シルトである。横断面形は逆台形状を呈するが、南東壁は 層の下部が抉れてオーバーハングする。

SE-020 出土遺物 Fig.12

弥生土器、古墳時代須恵器、黒色土器、中世土師器小皿・壺、瓦器、須恵質土器、中国産白磁、高麗焼締陶器、土製品、砥石、鉄製品が出土した。

56～58は土師器壺である。56は小片のため不正確だが復元口径15.5cm。57は丸底壺とみられ、復元口径17.4cm。58は底部ヘラ切りで、穿孔がある。59は黒色土器B類の椀で、摩滅するが内面はヘラミガキか。60～63は筑前型瓦器椀である。ヘラミガキは幅広で、隙間が多い。60と61は同一個体かもしれない。64は高麗焼締陶器の壺の小片である。灰褐色で、胎土に細かい白色砂粒を少量含み、焼成不良である。65は広東産白磁の平底皿で、内壁に蕉葉文を施す。66は土製品で、投弾である。

石製品はFig.20に示した。鉄製品は太い棒状をなし、ソフトX線撮影によつても形状が不明である。

12世紀前半、下っても中頃の井戸であろう。

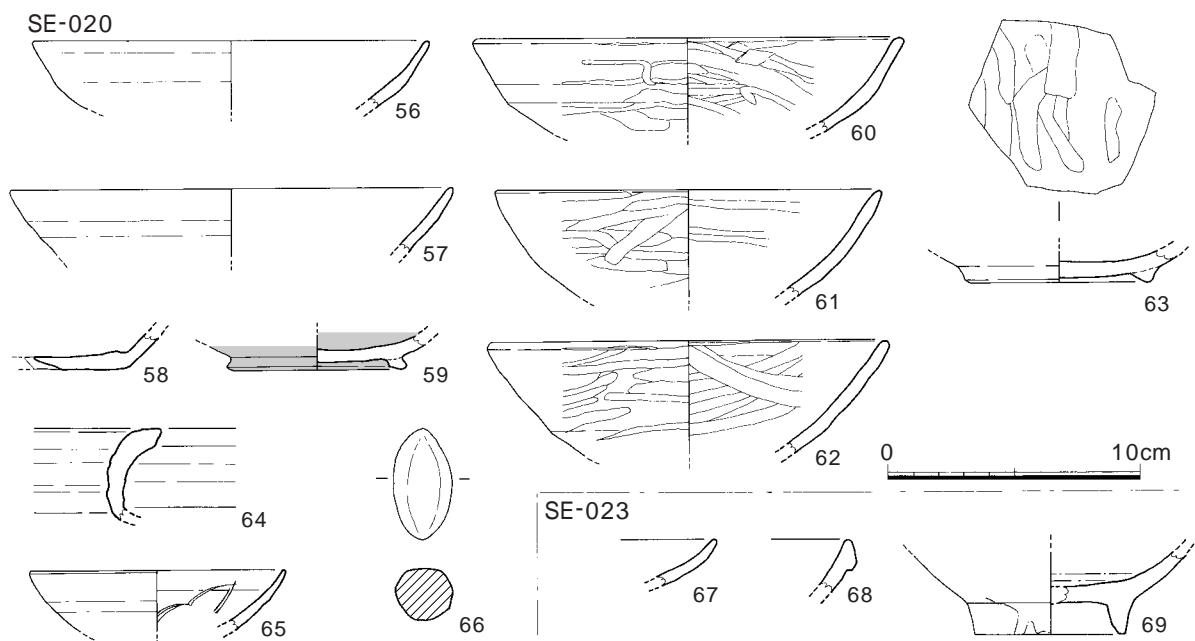


Fig.12 SE-020・023出土遺物(1/3)

SE-023 Fig.10、PL. 5

SE-020の北東1.3mに位置する。東西にやや長い楕円形プランで、長径1.2m、短径1m、深さは0.85mである。横断面形は逆台形状をなし、底面は平坦である。覆土および地山土はSE-020と同様で、やはり南東側の壁面が湧水によって若干抉れている。

SE-023 出土遺物 Fig.12

弥生土器、古墳時代須恵器、黒色土器、中世土師器小皿・坏(底部糸切り)、瓦器、中国産白磁、高麗焼締陶器、黒曜石チップが出土した。

図示した遺物はいずれも白磁である。67は広東産平底皿である。釉下に白化粧土を施すと思われる。68は碗類。69は椀類であるが、見込みを輪状に釉剝ぎする。

12世紀前半～中頃に位置づけられよう。

(3) 土坑

土坑は10基を報告する。一部のみを調査したものや倒木痕からの出土遺物は次項にまとめて報告する。

SK-001 Fig.13、PL. 5

調査区の北西隅に検出した。平面形はやや南北に長い円形を呈し、長径1.8m、短径1.6mを測る。横断面形は逆台形状をなすが、深さは27cmと浅い。底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土で、北西部から土師器坏の完品が出土した。

SK-001 出土遺物 Fig.14、PL. 6

弥生土器、古代須恵器、中世土師器小皿・坏(底部糸切り)、瓦器、中国産陶磁(越州窯系青磁・白磁・陶器)、高麗青磁、砥石が出土した。

70は須恵器坏で、高台が付き小振りである。71・72は土師器小皿で、器面が剥落し底部切り離し手法は不明。71は復元口径9.0cm、復元器高1.1cm。73は小皿または坏で、底部糸切り。74は土師器坏で底部糸切り、板圧痕がある。底部には焼成後に内側から開けた孔が2ヶ所あるが、故意か疑わしい。

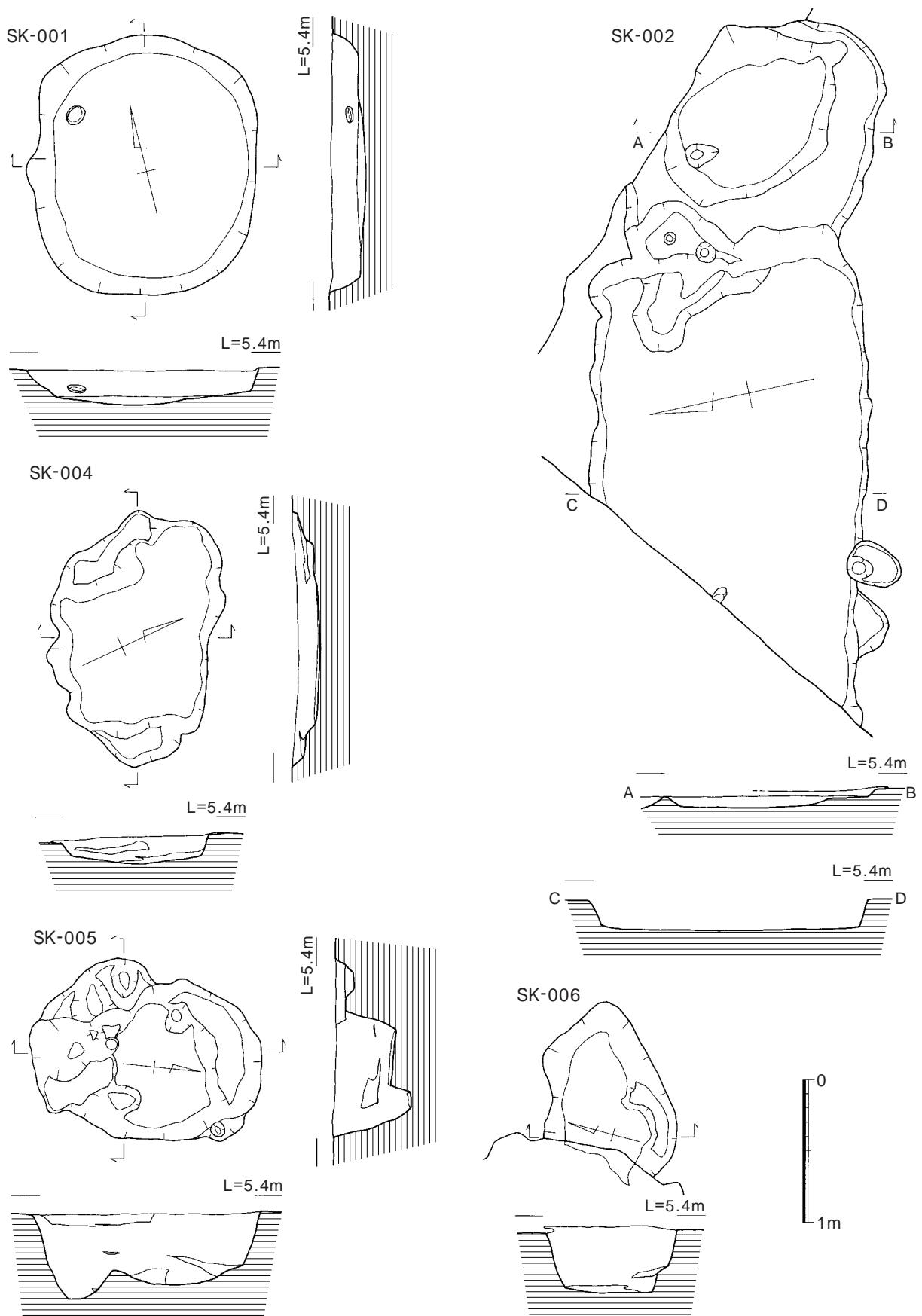


Fig.13 土坑SK-001・002・004・005・006 (1/40)

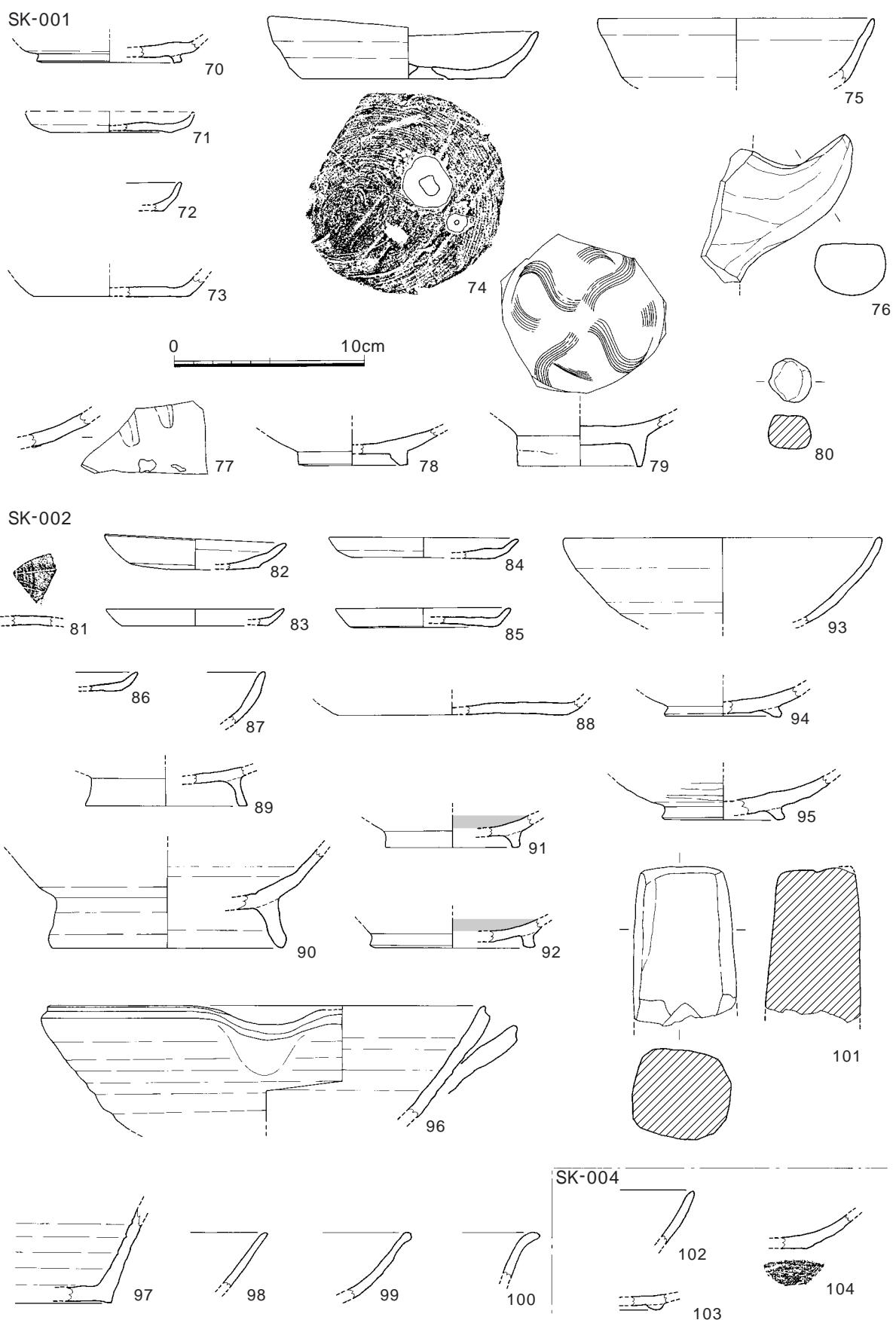


Fig.14 SK-001・002・004出土遺物(1/3)

器形が著しく歪むことと関係があるのかもしれない。口径は平均13.4cmで最大14.2cmまで歪む。71～75の土師器は胎土に雲母粒を多量に含むが、74のみ全く含まず異質である。75も土師器坏で底部を欠く。復元口径は小片のため不正確だが14.4cm。76は土師器甑の把手で、ヘラ整形する。

77は青磁の鉢か。外面に縦方向のヘラ彫りを入れる。外面下端に目土が付いており、高麗青磁であろう。胎土は淡灰色、釉は緑味の強い透明釉である。78は広東産白磁碗類で、外面は露胎である。79は白磁碗類で、見込みに圈線と櫛描文が入る。置付から外底は露胎である。

80は丸瓦を削ったとみられる瓦玉で、瓦の表面に当たる部分のみが燻しにより黒色を呈する。

出土遺物より、12世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

SK-002 Fig.13

調査区の北端に位置する。SD-003に切られる。遺構検出時には東西方向の溝と思えたが、掘削の結果、二つの土坑が切り合った遺構と考えた。西側の土坑は隅丸長方形プランで、長径3.5m以上、短径1.95m、深さ20cm、東側の土坑は南北に長い楕円形プランで、長径2.1m、短径1.5m以上で、深さ10cm弱である。覆土はともに暗褐色粘質土で、出土遺物に時期差は認められない。

SK-002 出土遺物 Fig.14

弥生土器、古墳時代須恵器、黒色土器、中世土師器小皿・坏・椀、瓦器、須恵質土器、中国産白磁、青磁、高麗焼締陶器、土製品、滑石製鍋、砥石が出土した。

81は須恵器蓋坏小片で、外面を回転ヘラ削りし、ヘラ記号を入れる。82は土師器小皿で底部ヘラ切り。口径9.6cm、器高1.6cm。83～86は土師器小皿で底部糸切り。85は板圧痕が付く。法量は83が復元口径9.4cm、器高0.9cm、84が復元口径10.0cm、器高1.0cm、85が復元口径9.2cm、器高1.0cm。87は土師器小片で、坏又は椀か。88は土師器坏で底部糸切り。89は土師器椀、90は大椀で、ともに高台が高い。91・92は黒色土器A類椀で、器面の残りが悪いが92の内面にはヘラミガキ痕が残る。93～95は筑前型瓦器椀で、高台は低い。95の外面に粗いヘラミガキを施すが、他は調整不明。96は東播系須恵質土器の片口鉢である。口縁は内湾気味に開き、端部は面取りされ内端が小さく隆起する。回転横ナデ調整で、内面下半は使用により摩耗する。内外面とも器壁が剥離しており、二次加熱を受けたか。

97は高麗焼締陶器の底部片である。外底に板起こしの痕跡が残る。胎土は暗い小豆色を呈し、器表面は黒化する。98・99は白磁碗類で、99は外面下半が露胎。100は青磁碗で、軟陶質素地に黄味がかった透明釉がかかる。国産(近世)の可能性もある。混入遺物か。

101は方柱状の土製支脚で、面取りし、角は丸く仕上げる。頂部面中央に浅い小孔、端部に浅い切り込みがある。滑石製石鍋はFig.20に図示した。

西側の土坑に10世紀代の土器が多い傾向があるが、12世紀前半代の遺物と混在する。

SK-004 Fig.13

SK-002の東側に1m離れて位置する。SD-003と接するが、直接の切り合いはない。不整な楕円形プランをなし、長径1.8m、短径1.05m、深さ20cmである。

SK-004 出土遺物 Fig.14

古墳時代須恵器、中世土師器小皿・坏、瓦器、中国産白磁が出土した。

102・103は筑前型瓦器椀で、器面は摩滅している。104は瓦器の坏か。外面に疎らなヘラミガキを施すが、底面はミガキの下に刷毛目状の調整痕がある。内面は平滑である。

この他、図化していないが白磁碗類の小片がある。12世紀頃の土坑であろう。

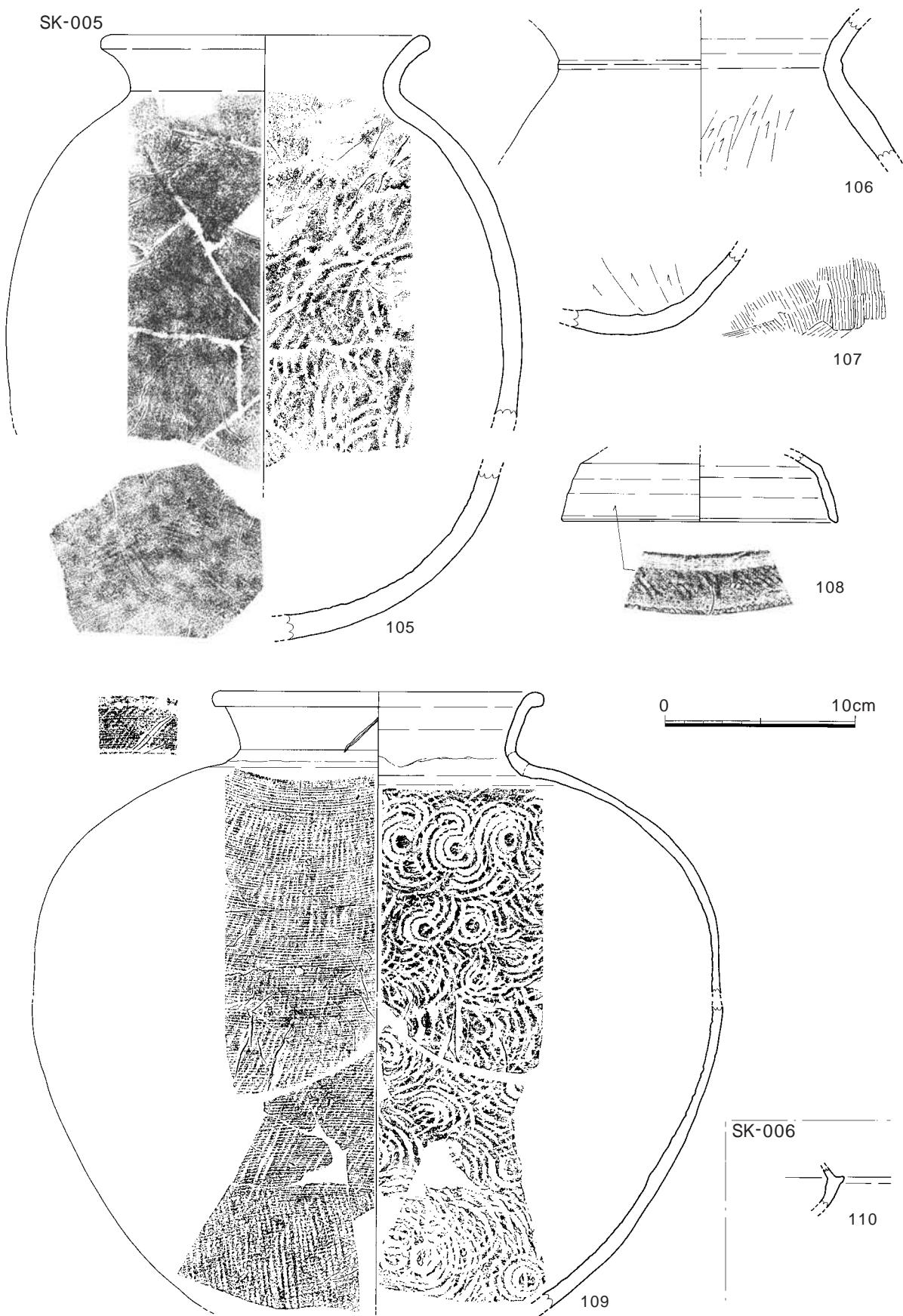


Fig.15 SK-005・006出土遺物(1/3)

SK-005 Fig.13、PL. 5

SK-004の北に位置する。南北に長い楕円形プランで、長径1.7m、短径1.2m。断面形は逆台形で、南側は複数の小ピットに分かれる。深さ50cm。覆土は黒色粘質土で、暗褐色の中世遺構とは異なる。

SK-005 出土遺物 Fig.15、PL. 6

古墳時代土師器・須恵器のほか、中世白磁片が1点混入して出土した。

105～107は須恵器の技法を用いて作られた土師器、いわゆる赤焼け土器の甕である。105は底部が接合しないが、長胴気味のなで肩で、口縁端部は丸くおさめる。摩滅するが、外面は上半を平行タタキ、底部周辺を擬格子タタキで、全体にナデ調整を加えたか。内面の当て具痕は弧状文である。破片が接合せず個数は不明だが胴部外面に黒斑があり、酸化焰焼成と考えられる。口径17.6cm、器高は32cm程度か。106は頸部片で、「く」字形に屈曲する。器面の残りが悪いが胴部外面はタタキ後、ナデ又は刷毛目調整したとみられ、内面はヘラ削り調整。屈曲部外面には横ナデにより捻り出したような貧弱な突帯が付くが、はたして意図的なものだろうか。外面に黒斑がある。107は丸底片で、外面刷毛目、内面は同心円文の当て具痕にヘラ削りを加える。106は黄褐色、107は橙褐色を呈するが、ともに胎土には石英・斜長石・カクセン石・赤色鉱物等の砂粒を多量に含んでおり、同一個体の可能性がある。

108は須恵器の蓋で、天井部との境に横ナデにより不明瞭な稜をつくり、天井部はヘラ削りする。口縁端部は内傾し、段が痕跡的に残る。口縁部外面に平行タタキを施し、横ナデ調整。端部外面をタタキ板ないしへらで細かく押圧する。口クロ回転は時計回り。復元口径14.5cm。109は須恵器の甕で、口縁端部は外側に肥厚し丸い。胴部は倒卵形で肩が張る。胴部外面は平行タタキの後、横力キ目を施すが、底部周辺は擬格子タタキのまま放置する。内面は同心円文の当て具痕を残す。頸部外面に斜めの力キ目があり、内面とともに回転横ナデを加える。頸部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残り、外面にヘラ記号がある。復元口径17.4cm。全体の1/3ほどの破片があるが接合せず、破片の状態で廃棄されたものと考えられる。

九州須恵器編年のa期、6世紀中頃の土坑であろう。

SK-006 Fig.13、PL. 5

SK-005の東に接し、これに大きく切られている。不整な楕円形プランで、長径不明、短径0.9m、深さ50cmを測る。覆土はSK-005と同一である。

SK-006 出土遺物 Fig.15

弥生土器、古墳時代須恵器・土師器が出土した。

110は須恵器壊身である。体部外面にのみ降灰を被る。小片のため図の傾きは不正確である。

出土土器が少ないが、SK-005に近い古墳時代後期の遺構と考えられよう。

SK-014 Fig.16

調査区のほぼ中央に位置する。～区にまたがって調査した。主軸方位をほぼ磁北に取る長方形プランの土坑である。南北長2.6m、東西幅0.9m、深さ50cmを測る。底面は平坦で、やや南に下る。ピットがいくつか切り合っている。

SK-014 出土遺物 Fig.17

弥生土器、須恵器、中世土師器、瓦器、土製品が出土した。

111は方柱状の土製支脚で、上下は欠けている。Fig.14-101に類似する。

中世の土坑とみられるが、詳細時期は不明である。

SK-017 Fig.16

調査区南西隅に位置する。溝SD-016に切られ、南東側は残りが悪い。細長い橢円形プランを呈し、長径2.35m、短径0.9m、深さ30cmである。

SK-017 出土遺物 Fig.17、PL. 6

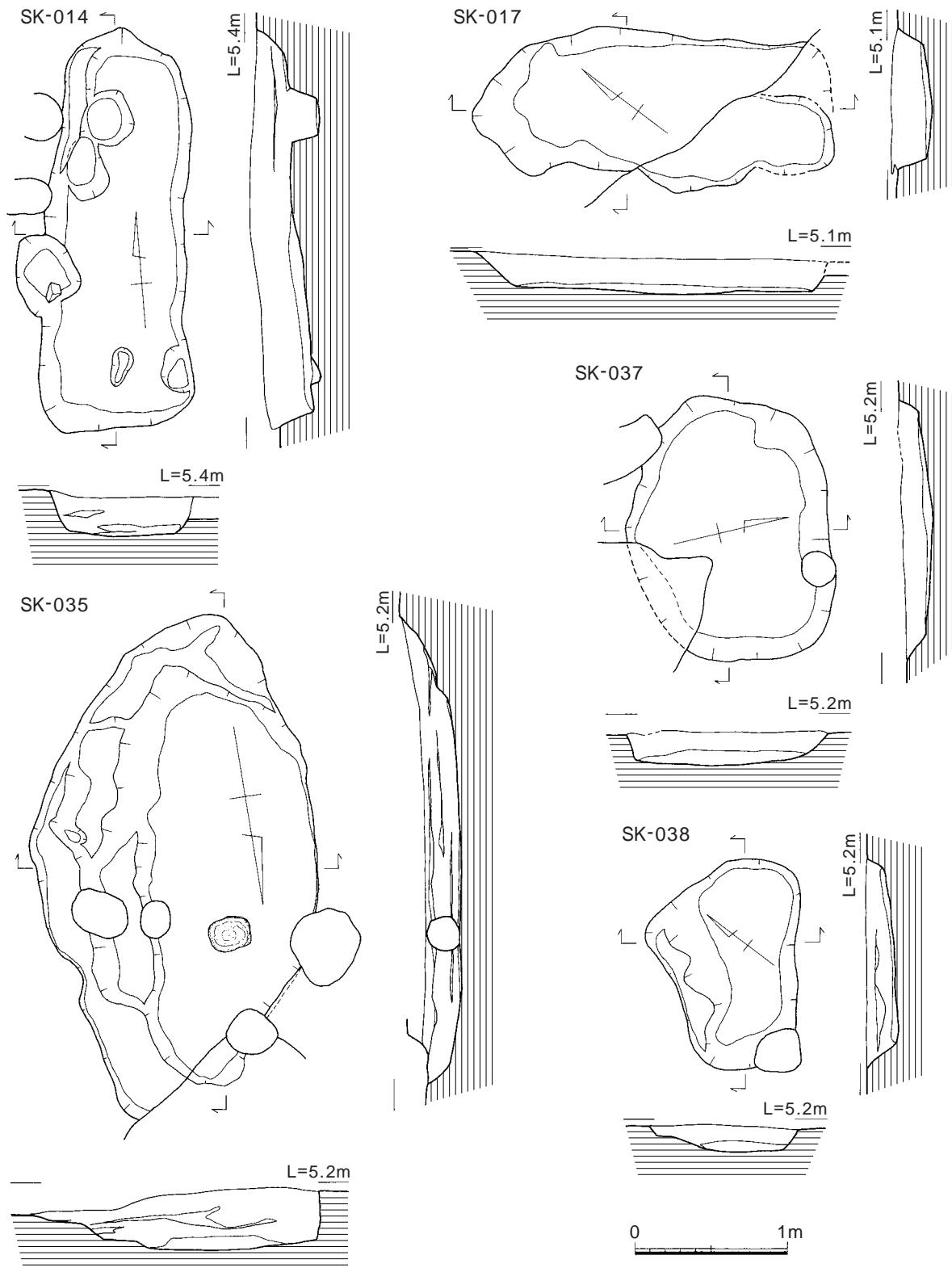


Fig.16 土坑SK-014・017・035・037・038 (1/40)

弥生土器、古墳時代須恵器・土師器が出土した。

112は須恵器の壺蓋である。天井部は丸味を持ち、口縁との境を沈線で画し、口縁端部には退化した段が残る。外面の1/2強にヘラ削りを加える。口クロ回転は逆時計回り。小片のため不正確だが復元口径12.8cm。113は須恵器の壺身で、底部に歪みがある。蓋受けの立ち上がりは内傾し、端部は丸い。底部の約1/2に回転ヘラ削りを施す。口クロ回転は逆時計回り。全体の1/2強が残り復元口径11.5cm。

114は土師器の甌把手で、ヘラ整形。先端は丸い。

九州須恵器編年のa期、6世紀中頃の土坑であろう。

SK-035 Fig.16、PL. 5

調査区中央のやや東よりに検出した。SK-038や小ピットに切られる。南北に長い楕円形プランで、長径3.3m前後、短径1.85m、深さ50cm。西側の壁は直に立ち、東側は緩やかに落ちる。底面は平坦で、やや北寄りに小児頭大の円礫をひとつ置く。

SK-035 出土遺物 Fig.17

弥生土器、古墳時代土師器・須恵器が出土した。

115は須恵器壺身である。蓋受けの立ち上がりはあまり内傾せず、端部内側に細い沈線を巡らせて段を表現する。底部の2/3ほどに回転ヘラ削りを加える。口クロ回転は逆時計回り。復元口径は10.6cm。116は土師器の甌把手で、ヘラ整形により先端は牛角状に尖る。

須恵器壺身は、SK-017の一段階前の特徴を示す。

SK-037 Fig.16

SK-035の南東に0.5m離れて位置し、溝SD-021に切られる。東西にやや長い楕円形プランを呈し、長径1.7m、短径1.3m、深さ20cmである。

SK-037 出土遺物 Fig.17

弥生土器、古墳時代須恵器、瓦器、滑石製鍋が出土した。

117は弥生時代中期の甌の口縁部片で、摩滅が著しい。雲母粒を極めて多量に含む。

瓦器が出土しており、中世の遺構であろう。

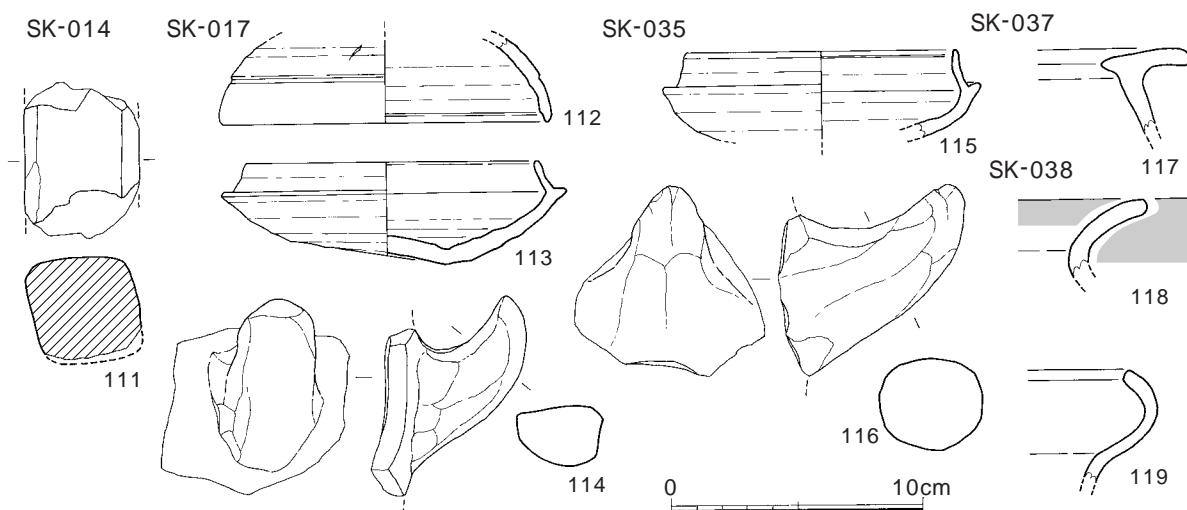


Fig.17 土坑SK-014・017・035・037・038出土遺物(1/3)

SK-038 Fig.16

SK-035の北側に接し、これを切る。不整な隅丸長方形プランで、長径1.35m、短径1m、深さ20cmである。

SK-038 出土遺物 Fig.17

弥生土器の他、摩滅した土器片少量がある。

図化した遺物はいずれも弥生土器である。118は小片だが短頸の壺か。横ナデ調整で、口縁端部内面から外面に丹塗りする。119は袋状口縁壺で、著しく摩滅している。

SK-035を切っており、古墳時代後期以降の土坑であるが、詳細時期は不明である。

(4) その他の出土遺物

報告から漏れた遺構や包含層から出土した遺物を図化した。Fig.18は古代以前の土器・土製品、Fig.19は古代・中世の土器である。Fig.20には各遺構から出土した木製品・石製品をまとめた。

土器・土製品 Fig.18・19、PL. 6

120～124は弥生時代中期の土器で、いずれもローリングを受ける。120は甕の口縁部、121・122は甕の底部、123は壺の底部、124は甕棺の口縁部である。

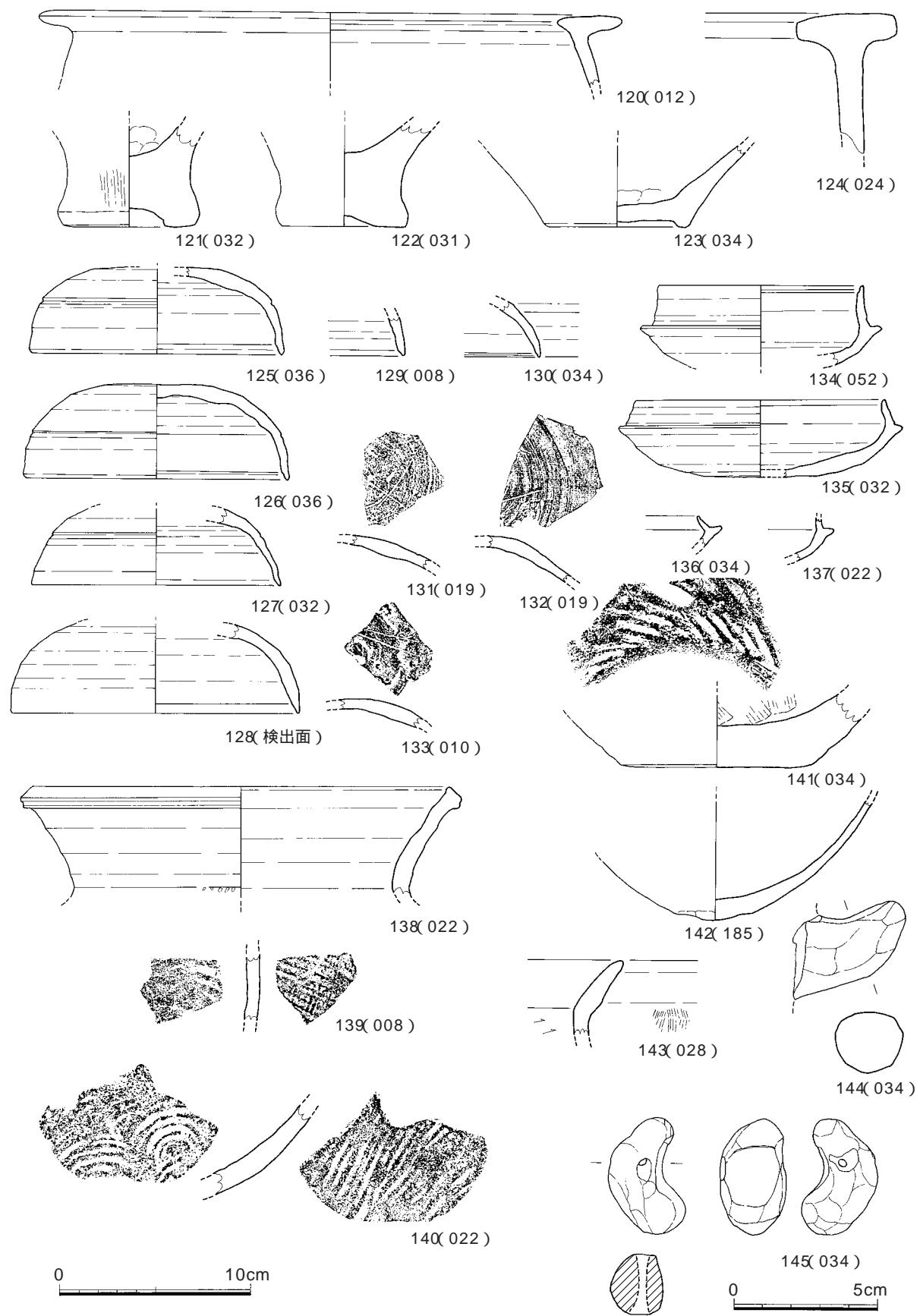
125～137は須恵器蓋坏である。125～127は蓋で、天井部との境を沈線で画し、口縁端部には内傾する段をつくるが127はかなり痕跡的である。いずれも天井部の約1/2に回転ヘラ削りし、口クロ回転は逆時計回り。復元口径は125が13.0cm、126が13.8cm、127が13.0cm。128も蓋で、天井部との境を示さず、口縁端部の段は痕跡的に残る。天井部の約2/3に回転ヘラ削りし、口クロ回転は時計回り。復元口径15.0cm。129は蓋の小片で、端部に退化した段がある。130も蓋の小片で、天井部との境に痕跡的な段があり、端部に沈線を回して段の名残とする。131～133は小片で、ヘラ記号がある。134は身で、蓋受けの立ち上がりは直立気味で、端部に沈線で段を作る。内底に円弧状の当て具痕を留め、外底の2/3以上に回転ヘラ削りを施す。口クロ回転は時計回り。復元口径10.6cm。135も身で、立ち上がりが内傾し、端部に沈線で痕跡的な段を表す。底部の1/2強に回転ヘラ削りを施す。口クロ回転は時計回り。復元口径13.0cm。136は身の小片で、立ち上がりが短く内傾し、端部は丸い。137も身で、立ち上がりがあまり内傾しない。以上の須恵器蓋坏は九州須恵器編年では、身134・137が一期以前、蓋125～127・130と身135がa期、蓋128がb期、身136がa期に相当しよう。

138は須恵器製作技法による赤焼土器の甕で、口縁端部を面取し外端に沈線を巡らす。横ナデ調整で、胴部外面に平行タタキをナデ消した痕跡が残る。復元口径21.6cm。139・140も赤焼土器で、それぞれ甕の胴部と底部片か。外面擬格子タタキで、内面は同心円当て具痕。140には黒斑がある。

141は古式土師器壺の底部か。平底で、外面平行タタキ、内面刷毛目調整。142も土師器甕の底部か。丸底で外底に指押さえ痕が残る。摩滅するが二次加熱を受けて脆い。143は古代の土師器甕であろう。外面縦刷毛目、内面ヘラ削りで、口縁横ナデ調整。144は土師器甕の把手で、先端は丸い。145は土製勾玉で、ヘラで雑に整形し、両側から穿孔する。

146～148は土師器小皿で、146は底部ヘラ切りで板圧痕があり、他は糸切り。146は口径9.0cm。147はほぼ完存し、口径8.4cm。148は復元口径8.8cm。149・150は土師器坏で、底部糸切り。149は復元口径11.8cm。150は復元口径13.2cm。

151～156は筑前型瓦器椀である。器面の残りの良いものは内外面にヘラミガキ痕が残り、加えて152の内面にはコテ当て痕、外面には指押さえ痕、154の外底には板圧痕が残る。



()は出土遺構番号

Fig.18 その他の出土土器・土製品（弥生時代～古代）（145は1/2、他は1/3）

157・158は高麗焼締陶器甕で、同一個体であろう。外面は平行タタキ、内面は丸太小口に放射状の刻目を入れた當て具痕があり、ともに不完全にナデ消す。當て具痕には年輪が認められる。突堤は低い三角形で横ナデする。暗灰色だが外面は黒灰色を呈しており、顔料を塗布したか。159～161は越州窯系青磁碗で、159は粗製品、他は精製品で蛇の目高台である。162～169は中国産白磁である。162～165は碗類、166は廣東産碗類。167は碗類で口縁が外面に肥厚して段をなす。168も碗類、169は廣東産平底皿である。170は青白磁皿で、見込みに陽陰刻文を入れる。外底から置付は露胎で赤く発色する。171～173は龍泉窯系青磁碗。171は類で、内面に劃花文を入れる。172は見込みに不鮮明な印花文があり、縁辺を丁寧に削って玩具としている。173は類で外面に連弁文がある。

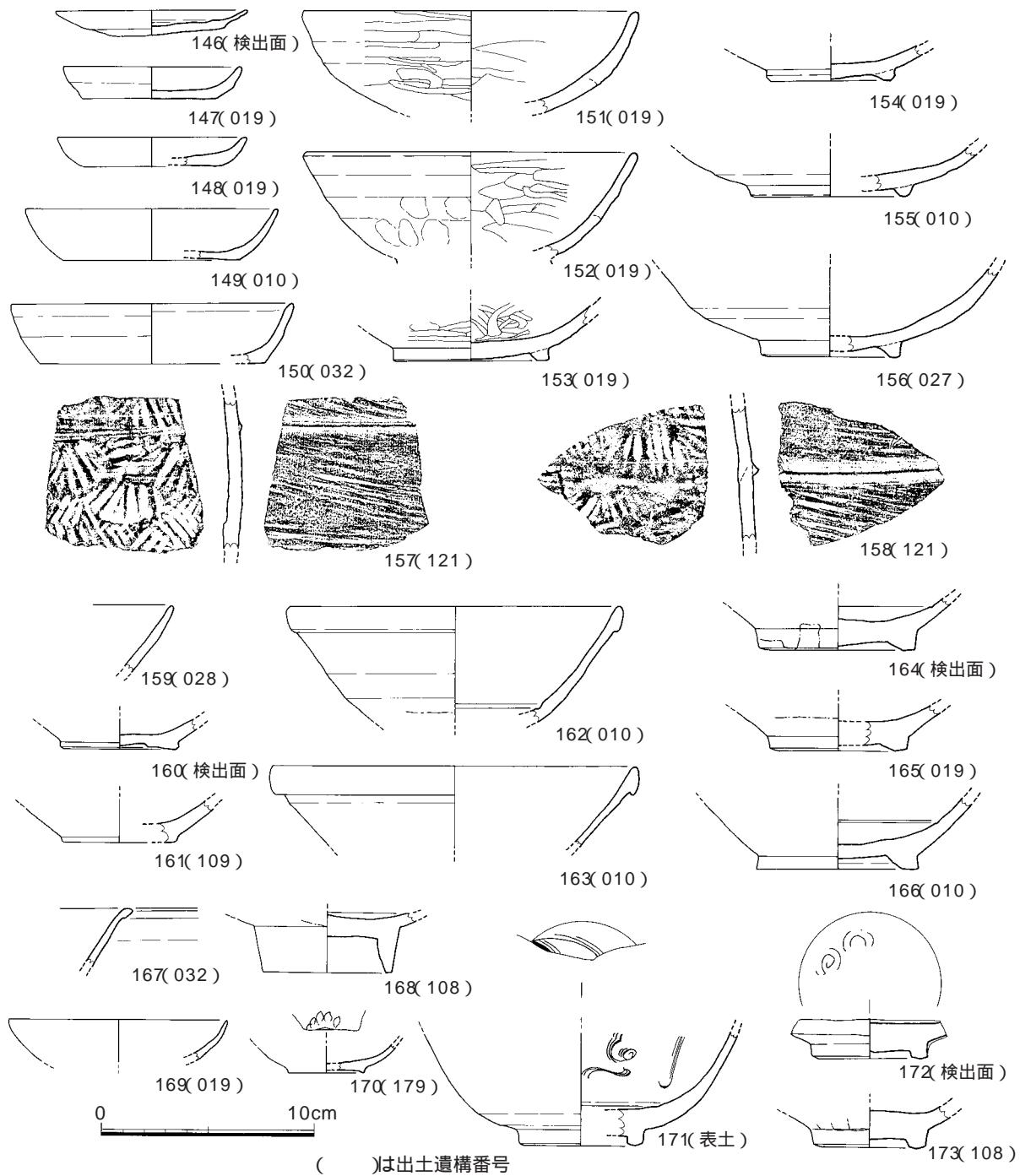


Fig.19 その他の出土土器（古代・中世）(1/3)

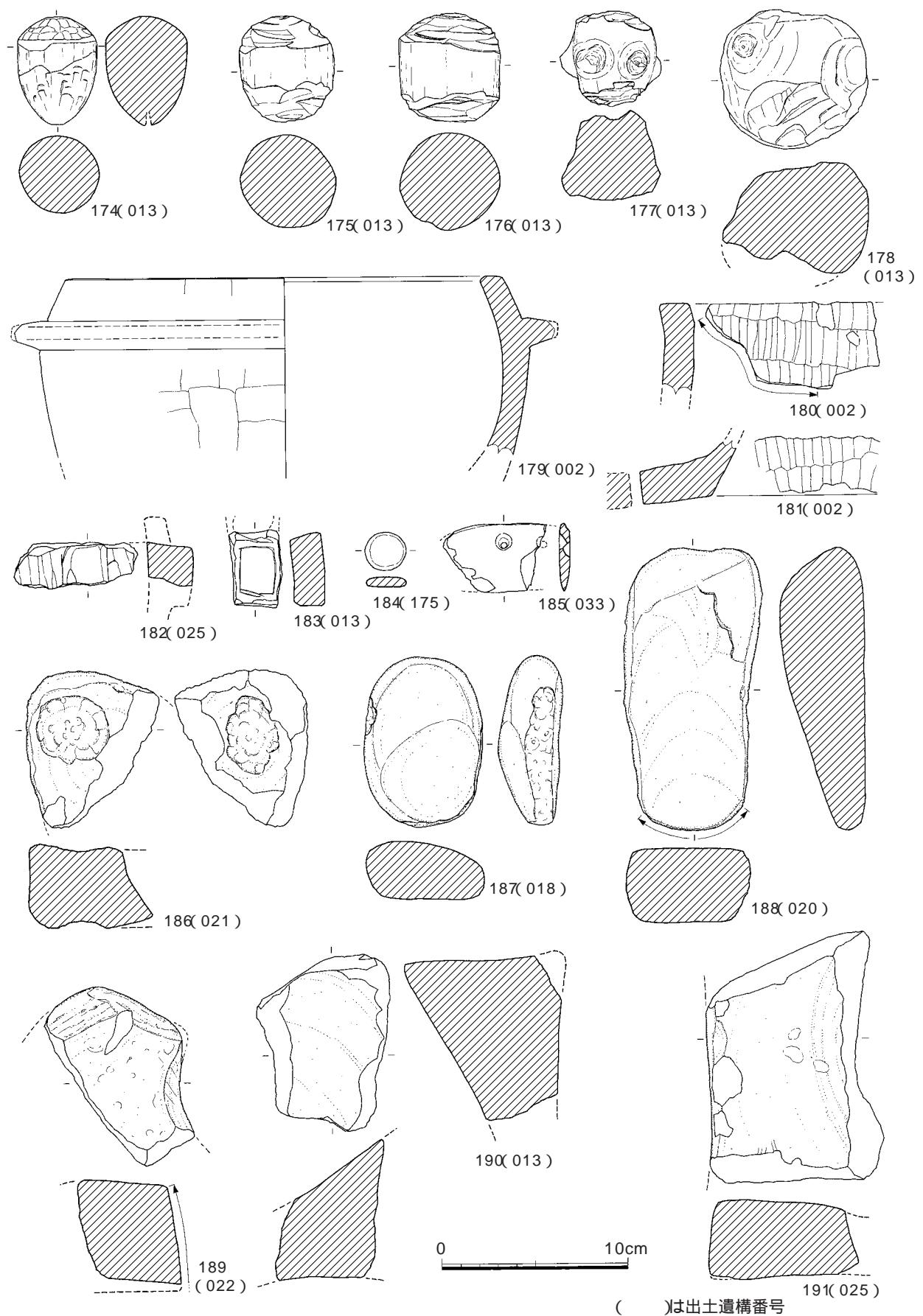


Fig.20 木製品・石製品 (1/3)

木製品・石製品 Fig.20、PL. 6

174は木製の独楽で、ドングリ形をなす。底部に円形の小孔が開いており、芯が外れた痕跡であろう。頭頂部と胴下半は細かく縦に削り、肩部に横位の削りを回す。胴部上半は大きな単位の削りである。175～178は独楽の素材と考えられる。上下面に粗い削りを施して球形にしており、後二者には枝の痕跡が残る。5点とも井戸SE-013から一括出土しており、12世紀中頃～後半のものとみられる。

179～183は中世の滑石製石鍋片である。179は外面の鍔以下に厚く煤が付着する。縦に削り出し、鍔周辺を横に削る。180は口縁、181は底部片で、丁寧な削りの特徴が類似しており煤は付着しない。いずれも再利用の痕跡を留める。182は縦位の耳が付く口縁部小片で、外面に煤が付着する。183は石鍋の再利用品で、内面に浅い沈線で方形を描く。頭部に環状の鈕が付くものと思われるが欠損する。

184～191は石製品である。184は碁石であろう。気泡混じりの黒色の石材を用いる。185は弥生時代の石庖丁片で、立岩産の輝緑凝灰岩製か。倒木痕と思われるSK-033から出土。186は砥石の再利用品とみられ、表裏両面に窪みがある。砂岩製。187は叩石ないし磨石で、下縁～右側縁と左側縁の一部に敲打・研磨痕跡がある。188は表裏両面を砥石として用い、下縁部を敲打具として使用する。189は右側面のみに研磨により生じた半円筒形の窪みがある。棒状の加工品を作るための砥石であろうか。砂岩製。190は砥石で、表裏両面を使用するが、片方の作業面は急傾斜をなす。砂岩製。191も砥石で、表裏両面が使用により浅く窪む。砂岩製。以上の石製品には弥生時代のものが含まれる。

第三章 おわりに

最後に検出遺構を時期別に分けて概観し、まとめとしたい。

遺構は検出できなかったが、弥生時代中期を中心とする日常土器や甕棺片が各遺構から出土しており、近隣に弥生時代中期集落および墓地が存在する可能性が強い。

古墳時代後期の遺構は土坑4基で、出土した須恵器は九州須恵器編年のa期に位置づけられるものが多く、その前後の期～a期の須恵器も少量ではあるが出土している。北側の第1次調査でも6世紀後半に属する柱穴・ピット等の遺構が見られることから、6世紀中頃～後半を中心とした短期のうちに集落が営まれたものと考えられる。遺物では須恵器の技法で製作された土師器、いわゆる赤焼け土器の出土が目を引いた。

越州窯系青磁や緑釉陶器など古代の遺物が少量出土するものの、遺構は全く認められない。倒木痕からは期の遺物が主に出土することから、古代以前に一帯が開墾されたことを示すのであろうか。

12世紀代の遺構は、波板状遺構1、溝状遺構5（うち1条は道路状遺構）井戸3、土坑5以上を検出し、出土遺物もこの時期のものが最も多い。報告していないピットの大半からも中世遺物が出土していることからみて、この時期には再び集落が営まれるようになったと考えられる。特筆すべき遺物として、井戸から一括出土した木製独楽とその未製品がある。

14世紀頃では水路とみられる溝を1条確認したのみである。この頃には集落が廃絶し、一帯の水田化が進んだのであろう。

南西100m弱で実施した比恵遺跡群第79次調査では、水城東門から博多方面へ伸びる古代官道（いわゆる東門ルート）の西側側溝と見られる8世紀代の溝を検出したが、駅路廃絶後の11世紀中頃～14世紀代にも道路として利用されたことを示す遺構を確認している。今回検出した・期の波板状遺構や溝等はこれに併行する時期のものであり、関連する遺構と考えられよう。

P L A T E S
(図 版)



二区作業風景(北西から)



1. 二区全景(南東から)



2. 二区全景(南東から)



1. 二区全景(南東から)



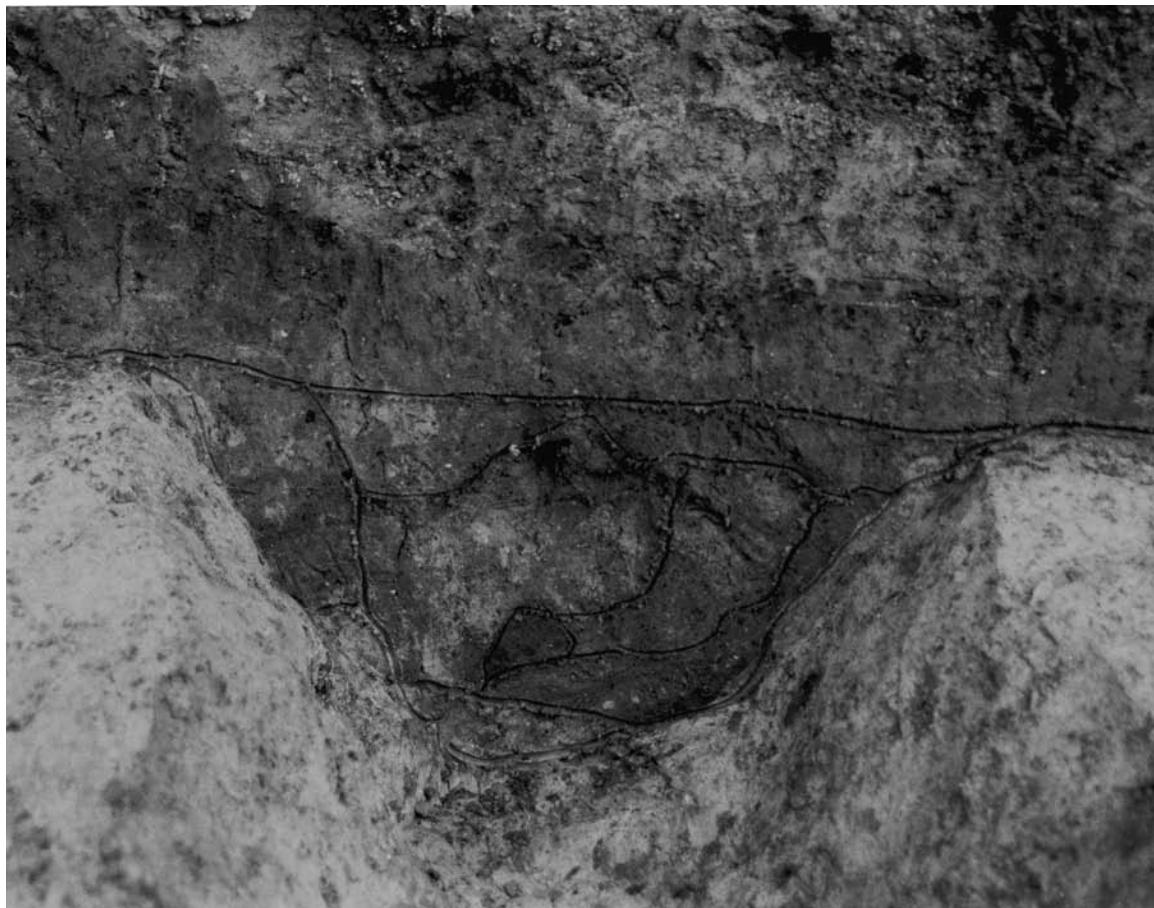
2. SD-011 (西から)



1. 二区 SF-030 西半部(南東から)



2. 二区 SF-030 東半部(南東から)



1. 二区 SF-030 の SP-183 土層断面(南から)



2. SD-003 (東から)



3. SD-016 (西から)



4. SD-021 北半部 (北から)



5. SE-013 (北東から)



1. SE-020 (南東から)



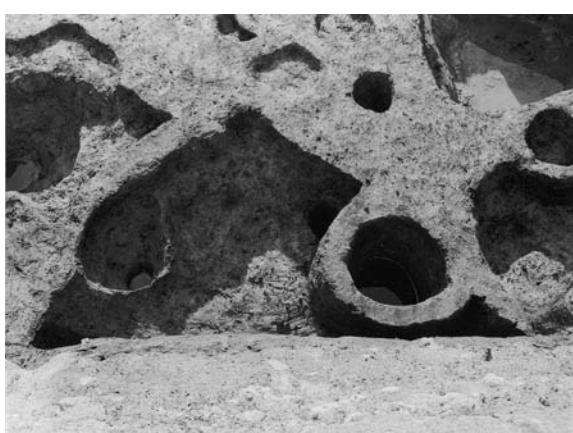
2. SE-023 (南東から)



3. SK-001 (南西から)



4. SK-005 · 006 (北から)



5. SK-009 (北東から)



6. SK-033 (北東から)



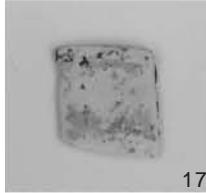
7. SK-034 (北から)



8. SK-035 (南から)

PL. 6

SD-016



17

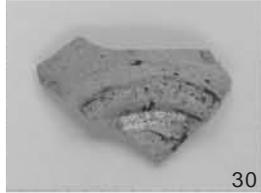


19



20

SD-021



30

SE-013



48



49

SK-001



74

SK-005



105



109

SK-017

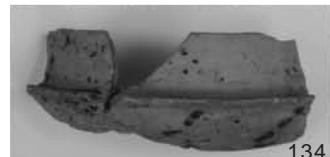


112

その他の土器(古墳)



125



134

その他の土製品



145

その他の土器(中世)

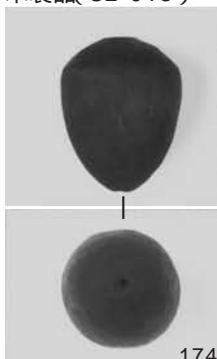


172

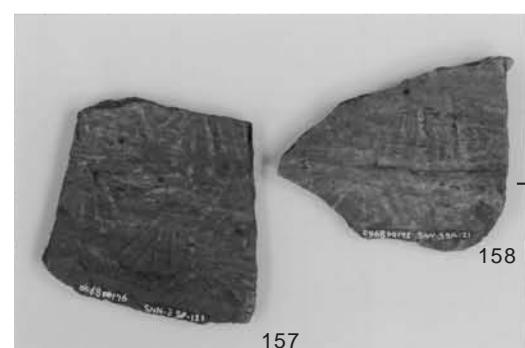


141

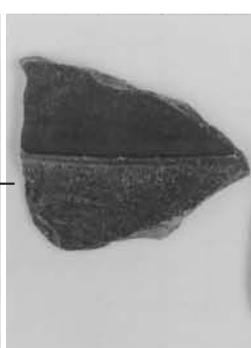
木製品(SE-013)



157



158



159



160



175



176



177



178

出土遺物 (縮尺不同)

番号はFig.に一致する

報 告 書 抄 錄

ふりがな	さんのういせきに
書名	山王遺跡 2
副書名	第3次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第879集
編著者名	吉武 学、田中克子
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんのういせき 山王遺跡 だいさんじ 第3次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 さんのうにちょうめじゅうさんのさん 山王2丁目13-3	40130	0128	33°34'47"	130°26'05"	20041201 20050112	274	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構遺物	特記事項
山王遺跡 第3次	集落	古墳時代 後期 / 中世	散布地 - 弥生時代中期 - 弥生土器 / 集落 - 古墳時代後期 - 土坑4 - 土師器 + 須恵器 / 散布地 - 古代 - 緑釉陶器 + 越州窯系青磁 / 集落 - 中世 - 波板状遺構1+溝5+井戸3+土坑5 - 土師器 + 須恵器 + 輸入陶磁器 + 土製品 + 石製品 + 木製品 (独楽1+未製品4)	古墳時代後期及び鎌倉時代を中心とする集落、木製独楽

山王遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第879集

2006年(平成18年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 弘文社印刷株式会社

福岡市博多区住吉3丁目8-17